文化庁 平成２８年度文化庁地域の核となる美術館・歴史博物館支援事業

大東 DAITO 奄美 AMAMI

だんじりを活かした地域共働事業実行委員会報告書 III

だんじりを活かした 地域共働事業実行委員会報告書 III

平成29年3月　だんじりを活かした地域共働事業実行委員会

ごあいさつ

本書は、平成 28 年度文化庁文化芸術振興費補助金（地域の核となる美術館・歴史博物館支援事業）を得て実施してきた事業について、その可能性と拡がりを期待し、報告するものです。

本事業は、「だんじり」をキーワードとして、大東市立歴史民俗資料館、原野農芸博物館、 京都造形芸術大学、奈良大学、大東市教育委員会、大東市立歴史民俗資料館市民学芸員連絡会がそれぞれの立場から博物館活動に関わってきました。

その活動の舞台は「奄美」と「大東」と大きく 2 つに分かれます。しかし活動の内容は、被災した博物館の再生と、地方資料館の博物館化という 2 つの「博物館づくり」のなかで、相互に作用しあってきたと言えるでしょう。

平成 22 年の奄美豪雨によって被災した原野農芸博物館では、京都造形芸術大学で文化財修復を学ぶ学生が、はやくから土砂の除去、資料の救出といった復興作業を支援してきました。そのなかで、土砂に埋もれた資料から「小松源助」銘のあるだんじりが発見されました。以降、平成 26・27・28 年度の本事業を通じて、京都造形芸術大学だけでなく、同じ「小松源助」銘を持つだんじりのある大東市の資料館や奈良大学とともに、写真によるトレース測量、3D 測量といった比較調査や、破損した 500 点以上の資料をデジタルデータとして管理するデジタルアーカイブ化の作業を行いました。また、クリーニングや整理作業の進展により、収蔵庫や展示室といった博物館ならではの空間を活用し、地域の子どもたちを対象とした子ども学芸員プログラムが行われ、「展示」だけでない博物館活動を展開することができました。

平成 25 年より市民学芸員とともに、だんじりに関わる調査・展示を行ってきた大東市立歴史民俗資料館では、平成 26、27 年度には、市民学芸員・学生・ 地域とともに、だんじりの「彫物」や「思い出」を対象に調査や展示を行ってきました。そして、平成２８年度には、市民学芸員が調査を企画した「祭りの音・祭りの声」という展示と、過去２年間の調査を「だんじりのジオラマ」としてまとめるという 2 つの活動を行ってきました。そのなかで、「奄美」の活動のなかで行ってきた保存・修復・3D 計測の方法や、展示や博物館教育の考え方を市民学芸員とともに学んできました。

本事業を通じて、「奄美」と「大東」という 2 つの場所で、博物館というハブ（中継点）にさまざまな人が行き交うことで、相互に作用しあい、新しい「博物館」の活動をつくりあげていくことができました。

最後になりましたが、本事業を実施するにあたりご協力いただいた関係機関、各位に厚くお礼申し上げます。

平成 29 年 3 月 31 日

だんじりを活かした地域共働事業実行委員会

委員長 笠井 敏光

目　次

ごあいさつ

目 次・凡例

趣旨・事業概要・組織

本文編

第 １ 部　博物館のはじまり、ことのはじまり

第 １ 章 原野農芸博物館のはじまり　８

第 ２ 章 だんじり事業のはじまり　１０

第 ２ 部　博物館の資料を救え！　ー被災資料のクリーニングと整理ー

第 １ 章　奄美文化財団原野農芸博物館被災しただんじりの資料化まで　１４

第 ２ 章　だんじりの継続的な資料化作業について　２０

第 ３ 章　だんじり部材のクリーニングの意義　２２

第 ３ 部　博物館資料を調べること　ー被災資料から一歩先へー

第 １ 章　龍間･経寺地区のだんじりにまつわる文字史料　２６

第 ２ 章　彫物の角度の計測調査　２８

第 ３ 章　彫物構成・構図比較調査　３４

第 ４ 章　だんじり彫物の3Dデジタルアーカイブとレプリカ製作　３６

第 ４ 部　二つの博物館づくり　ー地域の核となるミュージアムへー

第 １ 章 だんじり事業と市民学芸員　４２

第 ２ 章 だんじり情景模型の制作　４６

第 ３ 章 地域社会と博物館のほどよい関係　５２

おわりに　おわりよければ、すべてよし

だんじりを活かした地域共働事業をふりかえって　５８

資料編

図　　版　６２

参考資料　８２

執筆者紹介･謝辞　８９

凡　例

1.本書は、だんじりを活かした地域共働事業について、展示「祭りの音・祭りの声」･記念シンポジウム「だんじりからはじまり、だんじりでひろがる」、展示「博物館のたから探し～奄美に渡った大阪のだんじり」の内容を編集し、報告書としたものである。また本事業で作成したアーカイブデータ等については、右記にて公開している。(http://danjiri-museum.jp/index.php)

2.表紙のデザインについては大東市立歴史民俗資料館　森井綾乃が行った。

3.特に記載がない限り、執筆はだんじりを活かした地域共働事業実行委員会が行った。

4.「だんじり」は、「地車」とも表記されるが本書では、「だんじり」の語で統一をした。

◆趣　　旨

だんじりを活かした地域共働事業実行委員会は、「だんじり」を活かした地域共働の促進・地域と博物館の連携強化を図ることを目的としている。

本事業の目的の 1 つは、被災した原野農芸博物館のだんじりについて、この 3 年間の調査研究の蓄積を多言語対応のデジタルアーカイブとしてまとめること。このことを通じて、インターネットを活用した情報発信の充実を図り、もつて訪日外国人に対する日本文化の理解を深めることである。

2 つ目には、市民学芸員自身が地域と共働し、地域の文化財である「だんじり」について展示をすること。そのために、大学や博物館、資料館は「だんじり」等の地域の文化財に関する研修や調査を行うことで、技術や知識の伝達を行う。このことを通じて、市民学芸員が地域文化活動の担い手となることを目的としている。

◆事業概要

原野農芸博物館では、展示に向けて地域を巻き込んだ取り組みを行う。同時に被災から現在に至る経緯やクリーニング、写真撮影、3D 計測といった調査成果、それらをデジタルアーカイブとして「かたち」にする。

大東市立歴史民俗資料館では、これまでの事業を通じて形成された地域とのつながりを活かしつつ、市民学芸員によるだんじりの展示を開催する。また、これまで市民学芸員とともに行ってきただんじりのクリーニング、写真撮影、3D 計測、聞き取り調査等の成果を振り返りつつ、ジオラマとして「かたち」にする。

◆組　　織

だんじりを活かした地域共働事業実行委員会

委員長	笠井敏光	大東市立歴史民俗資料館名誉館長
副委員長	原野耕三	原野農芸博物館館長
委員	大野木啓人	京都造形芸術大学副学長
委員	伊達仁美	京都造形芸術大学教授
委員	正司哲朗	学校法人奈良大学准教授
委員	藤本悠	学校法人奈良大学専任講師
監事	黒田淳	大東市教育委員会生涯学習課参事
事務局長	小西立也	大東市立歴史とスポーツふれあいセンター副館長
事務局	武井二葉	大東市立歴史民俗資料館館長
事務局	溝辺悠介	奈良県立民俗博物館主任学芸員

【本　文　編】

第　1　部

博物館のはじまり、ことのはじまり

原野農芸博物館のはじまり

原野　耕三

原野農芸博物館の設立経緯

当館は、先代の原野喜一郎（1902～2001 年）が設立した。そのきっかけは非常に「人生観」に基づくものが多かったと思う。

（写真 1)原野喜一郎(1902～2001 年）

父は今の新大阪駅周辺で水稲栽培をおこなっていた。このあたりの水田は「ドタ」といい、腰のあたりまで沈むような深田で、田仕事がやりにくい湿地帯であった。近郊の人たちは「山田の人たちは、腰までつかる所には嫁はやらず、また新大阪の人たちは月夜の光で田が枯れる所には嫁はやらず」などと話していたことを年寄りから聞いたものだ。そこで、先代はこの一帯の水田の排水をよくし､三輪車が通る位の木造橋をつくり開墾、水田整備など行い、ヤンマーの山岡孫七社長と自動耕運機を考案することとなる。おそらく先代が初めてトラクターを使用したのではないだろうか。

さらに戦時中、先代は食糧増産のためサツマイモ育苗に力を注ぎ、また戦後は礫耕栽培で液体肥料を住友化学と共同で事業化することにも貢献した。

このように先代は「農業にかけた人生」のなかで独自の「人生観」が芽生え育ったと考える。そしてこの「人生観」によって博物館構想がうまれる結果となったと思う。

その博物館は昭和 39 年に開館。まだ全国的においても庶民の生活資料などは一部の研究者以外は関心が薄かった時期で、ましてや農業博物館などはなおさらのことであった。農具を収集しているときに先代は時折知人から「原野さんこんな百姓が捨てたクワやスキなどの農具を集めて人に見せているが、そんなお金があるなら自分の家でも建てたらどうか」と忠告を受けたり、笑われたりもした。しかしよく考えてみると弥生時代から現代まで約 2000 年、スキやクワの原型は少しも変わっていない。ただ木製が金属に変わっただけであり、今日の文化と産業の隆盛を築きあげた背景には長い年月培われた農業という基幹産業があったことで、今日の繁栄を生んだ犠牲のもとにある。祖先の貴重な遺産を収集し後世に残さなければ日本の農業の歴史が消滅するのではないだろうか。このように、先代の若き日の感動が博物館設立の原動力となったと思う。

(写真 2)礫耕栽培温室内部

(写真 3)原野農芸博物館(豊中時代)

だんじり事業のはじまり

原野　幸治

１．原野農芸博物館の設立と移転

昭和 33 年より国内外の農具や民具の収集を始め、このコレクションを中心とした服部農業博物館を 豊中で昭和 39 年に設立した。その後、昭和 43 年に原野農芸博物館と改名し、昭和 63 年より鹿児島県の奄美大島の住用村（現在の奄美市）に移設し、平成 4 年には、財団法人奄美文化財団原野農芸博物館、平成 25 年 4 月に一般財団法人奄美文化財団原野農芸博物館と なり現在に至る。照葉樹林文化地帯の暮らしと民具をテーマに、アジアの生活用具や民族衣装などの有形文化や祭祀儀礼や民俗伝承などの無形文化の調査収集をおこない、南西諸島文化との比較展示を試みている。

（写真 1）原野農芸博物館（奄美）

２．博物館の被災

平成 22 年 10 月 20 日、奄美大島を襲った集中豪雨により、博物館の裏山が崩れ、土石流が博物館をのみ込み、一瞬にして壊滅的な被害を受けた。土石流は、展示室や収蔵庫を押し潰した。展示資料や収蔵資料は土石流とともに流され、数トンもあるだんじりでさえ、土砂によって押し上げられている状態となってしまった。なかには海にまで流れてしまった資料もある。館内の土砂には、多数の収蔵資料が紛れており、資料と分からず廃棄されてしまったこともある。敷地内に流れ込んだ大量の土砂は、博物館職員や支援者が除去作業を行い、被災から 1 年半の年月をかけて、ようやくすべての土砂が除去することができた。

３．被災しただんじり

この時被災しただんじりは、昭和 38 年 10 月に当館に寄贈されたものである。譲り受けた際の『山車由来書』によれば、現在の東大阪市宝蔵新家の集落の人達が、大阪浪花本町の全備彫工小松源助に委嘱して、3 年有余を経て、明治 19 年に完成した。しかし完成後間もなく区画整理等で曳行することが困難となり、格納庫で保管されていた。その後現在の吹田の町でこのだんじりを購入することになったが、時代の変遷に伴いその巨体を曳航することが困難となり、寄贈を受けたものである。

４．博物館とだんじりの被災から復旧

平成 22 年に奄美大島を襲った集中豪雨により博物館資料の大半が被災したが、プロジェクトチームや京都造形芸術大学・東京農業大学などの大学関係、日本財団や鹿児島県・沖縄県博物館協会、地元奄美大島の博物館等の尽力により、現在はだんじりや他の被災資料の大多数は整理・保管された。また、収蔵庫機能を取り戻したことで、関連する展示やワークショップの実施も可能となった。

被災を経て、資料修復にかかる費用的なものはもちろん、専門職による技術提供など広範囲かつ長期的な支援がなければ、当館だけの力だけではなかなか復旧のめどが立たないと感じた。

昭和38年10月13日●日曜日 <16>

北摂 東部版

吹田のマンモス山車

豊中の収集家が引き取る

置きどころに困り

きょう解体式 大きいのがアダ

豊中の古文化財収集家に引きとられる吹田市南高浜町のマンモス山車

（写真 2)サンケイ新聞昭和 38 年 10 月 13 日（無断転載・複写不可）

第　2　部

博物館の資料を救え！
―被災資料のクリーニングと整理―

奄美文化財団原野農芸博物館被災しただんじりの資料化まで

伊達　仁美

１．はじめに

2010 年 10 月 20 日に奄美地方で発生した集中豪雨は、１時間当たりの雨量が 130 ミリ以上、24 時間の雨量が 600 ミリ以上を記録した。これにより同所に所在する（一財）奄美文化財団原野農芸博物館は、テレビや新聞などでも大きく報道されたとおり、その被害は甚大なものであった。被災直後、被害状況および今後の復興に関わる活動を確認するため、日本民具学会と文化財保存修復学会から、伊達と日高真吾氏（国立民族学博物館）が現地に派遣された。調査を行った 12 月 7 日現在には、ボランティアの協力を得て本館や農具館の土砂は除去されていたが、その他の収蔵庫や展示室に流れ込んだ土砂については未だ手がつけられていない状態であった。それらの建物に着手する足場を確保するため、重機による屋外の土砂を取り除く作業が続けられていた。なお、収蔵庫や展示室に流れ込んだ土砂については、同館職員が長期間にわたり連日除去作業を行い、2012 年 3 月にすべての土砂が取り除かれた。（写真 1. 2）しかし、建物の中には土砂の中に埋もれている資料も多くあり、それらは容易に救出できる状態ではなく、破片の散逸のみならず資料自体の散逸が懸念された。

土砂の中や、展示場、収蔵庫から救出された一部の資料は、付着した土砂を取り除くため、洗浄が行われていた。衣類については、大部分が救出され別棟で洗浄し乾燥中であった。しかし、民具については水洗いを行なってもその後それらを乾燥させる場所がないため、降雨にさらされ、また多湿な状況下でカビが発生するという問題が生じていた。そこで現時点では水洗いを一時中断し、雨水がかからないようブルーシートなどで覆い、資料の取出しと照合に重点をおくことを提案した。

被災から約１ヶ月半が経過した時点での視察であったが、土砂の撤去で日夜追われている状況であり、また、ライフラインの復旧の目途が立っておらず、博物館の再開には当分時間を要すると思われた。また、同館には常駐しているスタッフが少なく、外部からの協力体制が必要不可欠であり、資料の救出やそれらに対しての応急処置、リストとの照合など、さらには保存修復などでそれぞれの学会として協力できると考えた。

（写真 1）（写真 2）
博物館職員による土砂の撤去作業

２．京都造形芸術大学の取り組み

日本民具学会と文化財保存修復学会により被災状況の調査を行ない、原野農芸博物館への復興支援体制を企画した約 3 ヶ月後の 2011 年 3 月 11 日に東日本大震災が発生した。両学会のみならず、日本国中が東北の支援へと動いた。

そこで本学では学芸員が卒業生でもあることから、原野農芸博物館の支援を行うこととした。本学大学院では、研究系と表現系の教員と院生がそれぞれの専門の領域を生かしながら一つの目標を達成する「研究科合同演習（領域横断型）」いわゆる演習ゼミと、院生が自主的に大学に申請する制度である「大学院研究助成金」を利用して、原野農芸博物館への復興支援活動を展開することとした。2011 年度研究科合同演習（領域横断型）において、「被災博物館の復興支援活動」として、原野農芸博物館への支援活動を開始した。領域を横断した活動には、文化財保存修復を専攻している院生とともに空間演出デザイン、情報デザイン、環境デザインといったデザイン系、日本画を専攻する表現系の院生も参加した。これと並行して、大学院研究制作助成金を利用し、2011 年度から 2013 年度にかけて 3 年間の活動を行った。2013 年度には、「博物館機能の再開」をテーマに、2011 年度、2012 年度の 2 年間の活動の集大成として、「復興記念特別展」を開催した。

これらの活動には、本学大学院生が定期的に現地に赴き資料の保存整備を行い、その指導には空間演出デザイン学科教授大野木啓人、歴史遺産学科の伊達があたった。なお、学部生によるだんじりの整理作業は、2013 年秋から始まった（表 1）。

（表 1）京都造形芸術大学の取り組み

京都造形芸術大学の復興支援

大学院の授業の一環として修士 1 回生を対象に、研究系と表現系の教員と学生がそれぞれの専門の領域を生かしながら一つの目標を達成する本学大学院の特徴である活動

「被災博物館の復興支援計画」

- 2011 年度　研究科合同演習（領域横断型）教員 3 名と大学院Ｍ１生 2 名
- 2012 年度　オープンゼミ　　教員 4 名と大学院Ｍ１生 6 名
- 2013 年度　特殊演習　　教員 3 名と大学院Ｍ１生 2 名

研究助成制度による活動

「原野農芸博物館の博物館機能の再開」

- 2011 年度　大学院研究制作助成金　　大学院生 5 名
- 2012 年度　大学院研究制作助成金　　大学院生 5 名
- 2013 年度　大学院研究制作助成金　　大学院生 7 名

大学保護者会の支援による活動

「だんじりの整理作業」

- 2013 年度～2014 年度　蒼山会研究助成金　学部生 4 名

「だんじりの大型部材の整理作業」

- 2015 年度～2016 年度　蒼山会研究助成金　学部生 5 名

３．大学院生による復興支援

土砂が流入した展示室や収蔵庫から救出された資料は、被災直後から同館職員等により、付着した土砂を取り除くため洗浄が行われていた。しかし、水洗いを行なってもその後それらを乾燥させる場所がなく、降雨にさらされ、また多湿な状況下でカビが発生するという問題が生じていたため、水洗いを一時中断していたが、乾燥させる場所が確保できたことから、洗浄作業を再開した。

2011 年度は主に破損した建物から資料の取り出しや、土砂が付着した資料のクリーニング（写真 3)、金属部については、椿油を用いた防錆処理を行った。また、土石流により流された資料の多くは、資料本体に付与されていた資料番号や資料名を書いた付け札が外れていたため、台帳の資料写真をもとに 1 点ずつ確認作業を行った。クリーニングや資料台帳との確認作業が終了した資料は、修繕された収蔵庫に収蔵した（写真 4)。

2013 年度は、2011 年度、2012 年度の活動の集大成として、博物館機能の再開、さらには原野農博物館を核とした地域の活性化にむけて取り組んだ。過去 2 年間は、被災した資料の保存修復を中心に行ってきたが、2013 年度を最終年度と考え、その成果を 2013 年 12 月に行われる復興記念特別展とした。

記念展は、奄美文化財団の奄美群島の中での新たな位置づけを確保し、行政ではなし得ない国外を含め周辺地域からみた奄美という部分を担うことをテーマに「「2010. 10. 20 奄美豪雨」からの復興記念展　クサビ式締め太鼓ー奄美とアジアー」として開催した（写真 5)。

その展示テーマである奄美ではチジンと呼ばれる「クサビ式締め太鼓」は、東南アジアで多く見られ、奄美群島でも日常的に使用されてい

（写真 3)資料のクリーニング

（写真 4)クリーニング終了資料は収蔵庫に移動

（写真 5)「2010. 10. 20 奄美豪雨」からの復興記念展　クサビ式締め太鼓ー奄美とアジアー」を開催

（写真 6)踊りや歌の輪には、いつも太鼓がある(於：敬老会)

るものであるが（写真 6)、地域によって材質や使用方法に差異がみられる。また、その伝播形態についでは、資料自体の材質や制作技法の調査（写真 7)、収蔵資料の保存修復、さらに地域社会の中で太鼓を通じた人とのコミュニケーションなど、それぞれの院生の専門領域を生かし、かつ横断した展示を作り上げた。また、奄美大島をモデルケースとして離島が抱える諸問題をふまえた町づくりを提案するなど、本学の特徴を生かした活動となった。

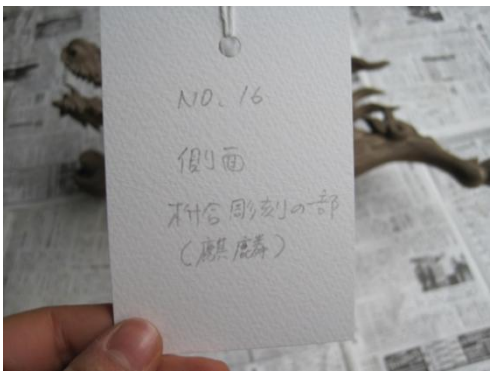
（写真 7)チヂンの制作技法の調査

４．だんじりの整理活動

大学院生の活動は、原野農芸博物館に所蔵されている民俗資料の保存修復に重点を置いていた。被災しただんじりは、土石流の直撃を受けた新館展示室にあり、活動開始当初のだんじりは、大きく破壊した状態で土砂に埋もれていた状態であった。それを職員の皆さんが時間をかけて、少しずつ丁寧に発掘し、部材が明らかになってきた。床一面に並べられた大量のだんじりの部材（写真 8）は、到底手の付けられるものではなかった。しかし学部生が、先輩たちの活動を引き継ぐ意味で、2013 年度からだんじりの整理活動を計画した。奄美大島への旅費については、大学保護者会が支援する「蒼山会研究助成金」を申請し、採択された。

（写真 8)床一面に並べられただんじりの部材

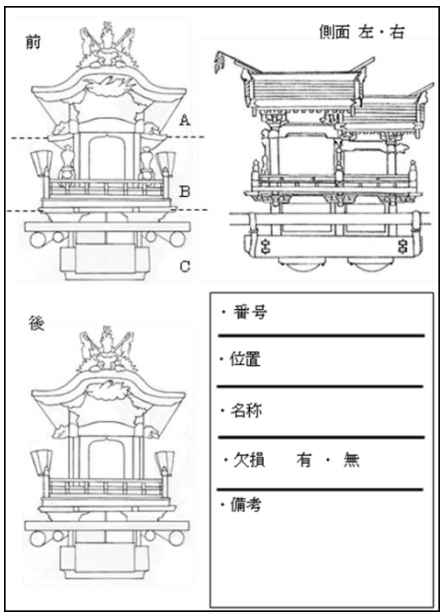
2013 年度から 2014 年度にかけて行っただんじりの部材整理作業は、被災しただんじりが修復され、再びその雄姿を見ることができる時のため、一つ一つの破片の部位を特定し、部材ごとに整理してゆく活動であった。収蔵庫は水拭き後、除菌・防カビ処理としてアルコール拭きを行い、クリーニングを終えた部材を運び入れた。運び入れた部材を写真撮影し、まず整理用タグを付けて一覧表を作成した（写真 9・10)。破損によって複数に分かれてしまった部材は、わかる限り枝番を付与し、部材同士の関連付けを行なった。



（写真 9)（写真 10)整理用の仮タグを付与

その後、本タグを付与した（写真 11)。

一連の整理作業の結果、バラバラになってしまった彫物を資料として整理できたことで、研究資料としての活用につながった。いわゆる資料化である（表 2)。しかし、だんじりのすべての部材が整理できたわけではなく、かつての壮大なだんじりを物語る大屋根や小屋根、台車などは手つかずの状態であった。あの被災からせっかく救出されただんじりであり、そのため今後も資料化に向けての活動を継続していく必要があると考え、2015 年度からの活動に引き継がれた。



（写真 11)部材の場所が特定できたものには、本タグを付与

（表 2)資料化

資料化とは

活用する際の情報提供ができるようにする

民俗資料の必須情報　5W1H

What　名称
When　いつ
Where　どこで
Who　誰が
Why　何のために
How　使い方

これがなければ、「古い道具」「古そうな道具」

先に述べたように、だんじりは土砂に押しやられ下半分が泥に埋もれた状態であったため、下の部材ほど損壊、泥汚れが著しい。泥で覆われた部材は水洗クリーニングを実施し、柱や台木などの大型部材に関しては水圧を調整した高圧洗浄機で泥を落とした。台木や高欄には錺金具や釘など金属も使われているため、錺金具は乾式クリーニングを施し、釘などの鉄部材には椿油を用いた防錆処置を施した。また、クリーニングを終えた部材を運び入れるための場所も整理作業の一環で整理をした。クリーニングが完了した大屋根、小屋根、台車などの大型部材を収蔵できるように旧水族展示室を整理し、運び入れた。

その結果、2016 年 10 月に、被災しばらばらになっただんじりの部材の資料化が終了した。なお、学生たちが 2013 年 6 月、部材を 1 点ずつ確認をしていたところ、破片の中から彫師「小松源助」の銘が入った部材を見つけ出すことができた（写真 12. 13)。

（写真 12)(写真 13）破片の中から彫師「小松源助」の銘が入った部材を発見

被災しただんじりは、北河内型と分類されるもので、これをきっかけに同じ北河内の大東市立歴史民俗資料館での調査が始まった。だんじりの部材は、本来高所部分にあり、また、幕で覆われていることも多く、このように彫刻部材が間近に見ることができるのは稀なことであり、一連のプロジェクト活動に発展した。これにより、本学の活動であるクリーニングや整理作業と並行して、プロジェクトでは、彫刻部材の調査や展覧会、ワークショップが行われ、学生たちも協力した。

５．おわりに

大学院での講義である領域を横断した演習では、災害が発生した際に迅速に対応できる人材を育成することを目的とした。しかし、応急処置だけではなく、復興まで視野に入れた援助ができることを本学の特徴とし、博物館再開にむけて、展示プランを提示し、展示に用いるグラフィック部分も含めた総合的な取り組みを行なった（写真 14. 15. 16)。その結果、2013 年の復興記念展の開催に至った。また、学部生によるだんじりの彫刻部材の確認等の整理作業において「小松源助銘」を発見したことをきっかけに本プロジェクトにつながった。

原野農芸博物館の復興支援に関わった院生や学生は、自身の専門領域と他の専門領域を融合させることで、大きな成果を得ることを学んだのではないだろうか。

だんじりは無形民俗文化財の中で祭礼研究としては取り扱われているが、彫り物や材質、さらに芸術性については先行研究がほぼなく、私たちが資料化を行ったことで、民俗学研究の新たな展開の可能性に寄与できたと思われる。

（写真 14)(写真 15)(写真 16)
博物館再開の復興記念展と関連ワークショップ

だんじりの継続的な資料化作業について

福原　凡香

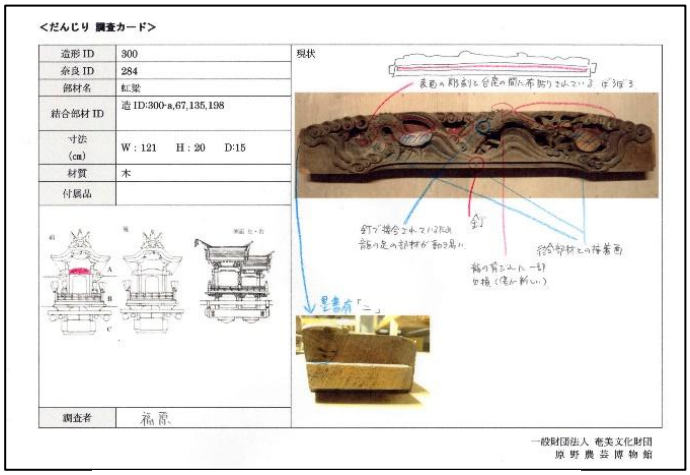
１．はじめに

原野農芸博物館(以後は当館と呼ぶ)の被災しただんじりは、京都造形芸術大学の学生たちによって 2013 年 9 月より部材整理が進められ、2016 年 11 月に終了した。一基のだんじりは 600 点余りの部材となって、改めて収蔵されることになった。クリーニングを行い整理番号をつけられた部材は、だんじりを活かした地域共働事業実行委員会や奈良大学の協力によって､デジタル･アーカイブ化や 3D 計測による比較調査など、様々な形で資料化されてきた。これらの資料を利用しながら継続して進めている当館におけるだんじりの整理及び保存活動について述べる。

２．部材の資料台帳作成

当館のだんじりは主に欅材を用いて作られているが、彫物の中には部分的に彩色が施され、特に龍や獅子などの動物や武者や力士などの人物には目に綿やガラスが使用されている。この他にも、布張りが施されていた部材もあった。これらの木材と異なる材質の部分は、部材を取り扱う際や今後の保存において注意が必要であり、目のガラスなどはクリーニングの際に彫物本体から外されて付属品扱いとなっているものが多い。部材と付属品には整理作業によって資料番号が付されリスト化されているが、『だんじり一括資料』として当館の資料台帳を作成することにした。資料番号などの基本的なデータは学生たちの整理作業やデジタル・アーカイブ化時の調査事項を使用し、部材や付属品の写真を印刷したものに直接破損箇所や彩色、墨書位置、取り扱い時の注意点などを書き込むことにした。

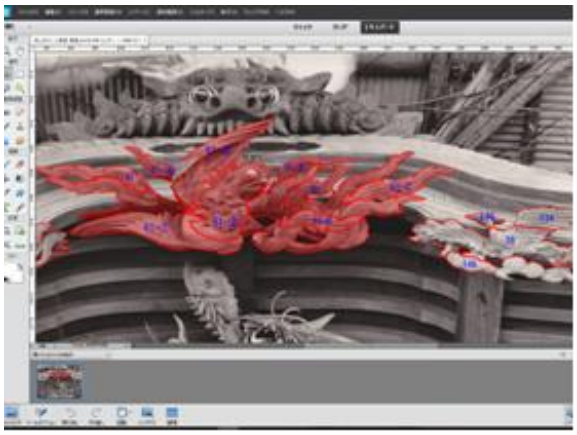
(写真 1)学生の記入した資料カード



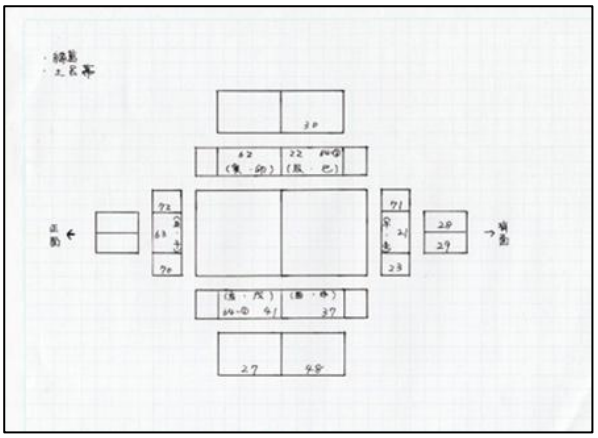
(写真 2)部材の資料台帳カード

３．部材地図の作成

現在ばらばらの状態であるだんじり部材については、2015 年より彫物を中心に被災前や被災時の写真を利用して位置の特定を進めている。参考となる図面などがないため、一点ずつ部材の形状や破損面を確認しては、位置が特定できた部材を被災前の写真データに直接書き込むという方法で部材地図の作成を行ってきた。しかし、作業を進めていく中では書き込みに利用できる写真データがない部材の方が多い。そのため、模式的なものではあるが手書きの図面に部材の位置を書き込んだ地図なども作成している。



（写真 3）作成中の部材地図の一例



（写真 4）縁葛や土呂幕の部材地図

４．部材の保存

当館がある奄美大島は亜熱帯気候で年間を通じて温暖多湿であり、降水量も多い地域である。そのため、時期によってはカビの発生などが懸念される。また、文化財害虫による被害を受ける可能性などもあるため、学生によるクリーニング作業の後などは特に収蔵している建物内の空気を扇風機や換気扇で循環させたり、部材の調査移動時に点検を行ったりした。現在収蔵建物内は除湿器を入れる程度の空調管理であるため、定期的な部材や温湿度の点検や風通しは必要であると考えている。

（写真 5）現在の収蔵状況

５．おわりに

土石流によって破損した当館のだんじりは、3 年間にわたるクリーニングと整理作業が終了し、被災資料のレスキュー活動としては一つの区切りがついた。また、彫物を中心にデジタル・アーカイブ化されたことで、一基の資料が 600 点余りの資料群として、新たな価値を持つことになった。位置特定の進んでいない部材や大型である屋台部の調査など、まだまだ資料化の完了までは多くの作業が残されているが、安定した保存方法を模索しながら、資料が活用しやすくなるよう調査整理を進めていきたい。

だんじり部材のクリーニングの意義
−文化財の持つ価値の引き出しと人材育成としての可能性−

魚島　純一

１．はじめに

一般に、文化財のクリーニングは、泥や汚れで隠された情報を引き出すため、あるいは汚れなどによって損なわれた価値を取り戻すためにおこなわれる。

一方で、クリーニングは文化財に直接触れる作業のため、方法などを誤ると、文化財の持つ価値や情報を損なう恐れもあるため、文化財に対する認識と十分な注意が求められる。

そのため、文化財のクリーニングは、文化財のことを熟知した専門家（修復の専門家や学芸員など）が行うことが一般的である。しかし、小規模な博物館施設などでは、必ずしも学芸員が専門としない分野の文化財を取り扱う機会も多くなり、また少人数では対処しきれず、結果としてクリーニングされないままホコリをかぶったままの状態で保管される文化財も少なくない。

災害でいっときに多くの文化財が被災した場合などでは、専門家のみでクリーニングをおこなっていたのでは、時間的制約などからすべての対象を救済できない事態も容易に想定される。

今回の事業の中で、文化財の保存に関心を持った学生や一般市民とともに、ワークショップとして、長年放置された状態の文化財のクリーニングをおこない、その結果注目すべき成果を上げることができた。

２．学生との被災資料のクリーニング

昨年度(2015年10月10日から5日間)、だんじり部材のアーカイブ化の一環として、2010年の奄美豪雨で被災した博物館資料の一部のクリーニング作業をおこなった。文化財に関する一定の教育を受け、知識として文化財の取り扱いを心得た学生（奈良大学文化財学科）を指導しながら、限られた時間と限られた条件の中で与えられた課題をこなす試みは、指導する立場としても、また初めて実物を前に実践する学生の立場としても未知のものであったが、結果、泥まみれの文化財を再び価値あるモノにするお手伝いができたと考えている。

この事業を通して、文化財に関して学ぶ学生に直接文化財に接して新たな発見に結びつく経験をさせることは、将来、直接的であれ、間接的であれ、文化財の持つ価値を十分に認識したうえで、文化財の保存に取り組む、あるいはその必要性を理解し、地域社会で文化財に関わる社会人を育てること、すなわち文化財の保存に関わる人材育成として大きく貢献することを感じた（詳細は『だんじりを活かした地域共働事業報告書Ⅱ』参照)。

３．市民学芸員とのクリーニング

この経験をもとに、今年度は長年放置されホコリまみれになっていただんじり部材を、まったくクリーニングのことも知らず経験のない一般の市民にレクチャーしながら作業するワークショップを実施した。

ワークショップは、2016 年 6 月 19 日に大東市立歴史民俗資料館でおこなった。参加した市民学芸員は 4 名である。

作業をおこなう前に、文化財のクリーニングの意義や文化財の重要性、取り扱いや作業上の注意をレクチャーした。その後、実演（写真 1）をしながらさらに注意すべき点などを伝え、参加者それぞれに作業をおこなってもらった（写真 2)。ワークショップそのものは､昨年度経験した学生 2 名をアシスタントとしてマンツーマンに近い形式でおこなった。

昨年度の作業で学生がそうであったのと同様に、はじめはどうしてよいかわからなかった市民学芸員も、作業をすすめるうちにコツをつかみ、スムーズにクリーニングできるようになっていった（写真 3、4)。

経験しなければわからない力加減や文化財の取り扱いなどを、適切な指導のもとで安全に経験することで理解が早まったものと考える。

この一連のワークショップの中で、偶然、市民学芸員が隠れていた情報を発見することもできた（写真 5)。これにより、単に古めかしい木ギレのホコリを取りきれいにする単純作業に思われていたものが、文化財の隠れた情報を引き出し、その価値を高める重要な作業であり、自分たちがまさにその手助けをしているという意識が芽生えたのである。

４．文化財クリーニングの意義

文化財のクリーニングは、地味で単純な作業であり、決しておもしろいものではない。しかも専門的な知識や技術が要求されるため、一般の市民にとっては別世界のことでしかないだろう。しかし、自分たちの住む地域の歴史を物語る身近なモノが持つ情報を、自分たちの力で引き出して、皆でその価値を再認識するという今回の事業は、地域に埋もれた多くの未指定の“文化財予備軍”の発見や保存に必ず貢献すると確信する。

また、近い将来必ず発生すると予想されている大規模災害で文化財が被災した際にも、専門家以外で文化財のクリーニングができる人材を要請しておくことはきわめて有効であると考える。

言うまでもなく、文化財は唯一無二の存在で、一度傷ついたり失われると二度と取り戻すことはできない貴重なモノである。文化財に直接触れ、直接手を下す文化財のクリーニングは、いわば文化財の保存修復作業の第一歩であるという認識を持つ必要があるだろう。そのため、決して安易におこなってよいことではなく、専門的知識を有した者の指導のもと適切におこなわれるべきことである。

しかしながら、適切な指導により文化財の安全が担保された状態で、一定の教育を受けた者がおこなうことは、文化財の保存にとって大きな意味があり、そのことで文化財の価

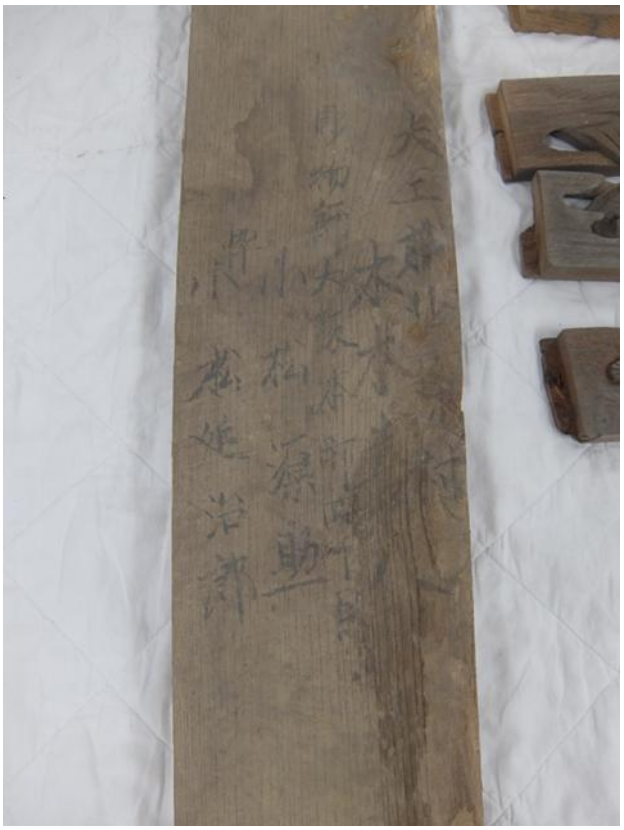
値を理解し、直接的、間接的に文化財の保存に取り組む人材の育てることに大きく貢献するであろうことも指摘しておきたい。

（写真 1）　ワークショップでの実演のようす

（写真 2）　参加者によるクリーニング作業

（写真 3）　クリーニング前の部材

（写真 4）　クリーニング後の部材



（写真 5）　クリーニングで見つかった墨書
「彫物師　小松源助」
などの銘が読み取れるようになった

第　3　部

博物館資料を調べること
―被災資料から一歩先へ―

龍間・経寺地区のだんじりにまつわる文字史料

大畑　博嗣

１．はじめに

平成 26・27 年度の 2 年間、だんじり本体に書かれた墨書や刻まれた文字、各地区の地車保存会に伝わる古文書など、だんじりに関わる文字史料を調査・検討を行ってきた[1]。

今年度は、昨年に解体された龍間・経寺地区のだんじりにまつわる文字史料について、調査を行ったので、本稿では特徴的な史料を取り上げて、紹介する。

２．龍間・経寺地区に伝わるだんじり関係の文字史料

（１）調査に至る経緯

平成 27 年 11 月に、現在曳行されていない経寺地区のだんじりが解体されることとなり、彫物・部材と共に、龍間・住吉神社境内に保管されていた太鼓・幕・古文書などを資料館で借用し、調査されることとなった。その後、彫物についてはクリーニング作業がおこなわれ、古文書についても市民学芸員が中心となり、史料目録の作成に向けた調査カードの記入と記録写真の撮影を行った。

（２）文書群の概要と史料紹介

今回、一次調査が終了したことに伴い、文書群の全体像が把握出来たので、文書群の紹介と特徴的な古文書を紹介していく。

（写真 1）経寺地区のだんじり関係文書

この文書群は、木箱に保管されており、74 点の古文書が確認出来た。文書群の多くは「花代」の記録といっただんじりに関するものや、年末年始に神社のしめ縄等で利用される藁を集めた記録が多く残されている。

この文書群の中で最古の年紀が記されているものとしては、文政 13 年（天保元年、1830）に作成された「獅子舞建立帳」と表紙に書かれた帳簿である。内容としては、獅子頭を作成する際に、金銭を出資した人名と金額を「龍間村若連中」が取りまとめた記録である。その他にも、文久 3 年（1863）と翌元治元年に作成された「地車幕銀寄帳」という記録が残されている。これは 2 年間に渡ってだんじりの幕を購入、もしくは作成する際に、金銭を出資した人名と金額が記されており、先述の

（写真 2）「獅子舞建立帳」

「獅子舞建立帳」と同様に「龍間村若連中」が取りまとめている。

また、文久元年に太鼓の皮を張り替えるため村人より寄進を募った記録である「太鼓張替寄進帳」や、弘化 4 年（1847）に材木を集めた「財木寄進帳」なる記録が残されている。このように 74 点のうち、江戸期に作成された史料は 5 点確認出来たが、それ以外は明治・大正期のものである。上記に示した 2 点の「地車幕銀寄帳」と「太鼓張替寄進帳」から、龍間には江戸末期からだんじりを曳行していたことがわかるが、元治元年から 10 年が経過したころにだんじりを新調せざるを得ない状況に陥っている。明治 12 年（1879）作成の「地車金寄扣帳」と題された史料が残されている。この史料は、だんじりに関する金銭を集めて若中総代が取りまとめた記録である。さらに、実際だんじり本体に墨書が残されており、小屋根側面虹梁の裏に当時若中の係であった 6 名の人名と共に、「神武紀元／二千五百三／十九年八月新調」と書かれている。「神武紀元二千五百三十九年」は明治 12 年にあたり、この年の 8 月に新調されたことが判明する[2]。

さらに、今年度市民学芸員による彫刻・部材のクリーニング作業において、新たに墨書が確認された（第 2 部第３章）。大屋根と小屋根の間仕切り部分の柱の内側に装着された部材の裏面に「明治十二歳第六月調之」と「大工職北條村／木村喜八／彫刻師　大阪本町四丁目／小松源助／悴／小松延治郎」と書かれいるのが確認された。この墨書により経寺地区のだんじりは、明治 12 年に北条村の大工木村喜八により建造され、彫物は北条中之町と原野農芸博物館、四條畷市雁屋と同様に小松源助の手によるものだと判明した。また、小松には延治郎という息子がおり、延治郎と共に彫物を制作したことが明らかとなった。

上記のことから、明治 12 年にだんじりが新調されたことが判明したが、文書群の中にはだんじり庫についての史料も残されている。明治 15 年の「楽車蔵新築に付き入費計算簿」と、翌 16 年の「地車蔵に付き入用記」と題された記録が現存しており、各年でだんじり庫建築のために支払った経費が記されている。このように残された記録から、だんじり庫が完成するのは、だんじりが新調された 5 年後の明治 17 年以降ではないかと推測することが出来る。

３．むすびに

これまで龍間・経寺地区に伝来しただんじり関係の文書群とだんじりに残された墨書の紹介を行ってきたが、先に触れたように、史料点数などの簡単な文書群の全体把握が終了しただけで、本格的な調査・研究はこれからである。今後、史料の目録化作業と、個々の史料を翻刻して分析する必要がある。

---

1 拙稿「在銘だんじりの調査」（『だんじりを活かした地域共働事業実行委員会報告書』、株式会社アステム、2015）、拙稿「だんじりにまつわる文字史料」（『だんじりを活かした地域共働事業実行委員会報告書Ⅱ』、株式会社アステム、2016）

2 前掲註 1、2016 年報告

彫物の角度の計測調査

甲斐　規予子

１．はじめに

だんじりを装飾する彫物は、草木や動物や、故事・神話・合戦物などを主題として人物が彫られるものが多い。それらの内、特に動物や人物の顔に注目すると、彫物はどれも頭がやや俯いているが、その俯き加減についてはそれぞれ差異があることに気付いた。中でも屋根周りの彫物については、下から見上げる観衆と彫物の目が合うよう、大きく角度が付けられていると仮定した。本章では、「小松源助」銘のある原野農芸博物館と中之町地車保存会のだんじり彫物の頭の俯きの角度を実際に計測し、どれだけの角度が付けられているのか、また 2 台のだんじりを比較し、角度の付け方に共通点があるのかを明らかにしたい。

２．原野農芸博物館と中之町のだんじり彫物の角度

原野農芸博物館所蔵だんじりの大屋根・小屋根周りにある獅噛、枡合、車板、虹梁の彫物を対象として、計測による角度の比較を試みた。

また、だんじりの彫物が一体化した資料として、中之町のだんじりの調査も行った。このだんじりにも「小松源助」銘が刻まれており、同じ彫物師が手がけたという共通点があるため、原野農芸博物館所蔵だんじりの比較対象として選定した。部材については、原野農芸博物館のだんじりと比較するため、屋根下に位置する獅噛、枡合、車板、虹梁を計測する。

３．だんじりの彫物計測

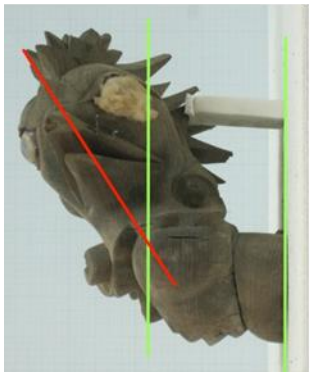
（１）（一財）奄美文化財団原野農芸博物館所蔵だんじりの彫物計測

彫物の角度の計測は、写真撮影を行い、その写真上で彫物の主題である、獅子や麒麟などの鼻先が垂直に対してどれほどの角度で俯いているのかを計測していくこととした。

まず、撮影対象の背後の壁に方眼紙を貼りつける。次に水平な台を用意しその上に対象物を置き、彫物の鼻先の中心（眉間から鼻の頭、唇の中心を通った顔の中心線）が見えるように撮影を行った（写真 1、2)。次に撮影した写真に、画像加工ソフトの、SYSTEMAX 社製のペイントツール SAI を用い画像処理を行った。方眼紙に合わせ垂直線（写真１、2 の緑線）を引き、対象物の彫物の顔の鼻先を中心点として Y 軸に中心線（写真 2 の赤線）を引き、この 2 本の線が交わる部分の角度を分度器を用いて計測した。大屋根についている獅噛は取り外すことが出来なかったため、直接分度器をあて、計測を行った。

（写真1）車板（獅子）側面

（写真2）車板（獅子）正面



（写真 3）懸魚（鳳凰）側面

（写真 4）懸魚（鳳凰） 正面

（２）大東市北條中之町のだんじりの彫物計測

大東市北條中之町のだんじりは、上記の様な方眼紙を用いた写真撮影が不可能だったため、別の計測方法をとった。彫物の高さと、彫物の底辺から最も角度が付けられている部分の頂点から垂直に真下部分までの長さを定規等を用いて計測した（写真 5）。測定した値をもとに、角度を導き出した。

獅噛に対しては直接分度器を当てて角度を計測した（写真 6）。

（写真 5）中之町所蔵だんじりの計測

（写真 6）獅噛の角度の計測

４．調査結果

原野農芸博物館所蔵だんじりは、大屋根の正面についている獅噛と、小屋根との間にある獅噛の角度を比較することができた（表 1)。正面についている獅噛は 25°で、小屋根と大屋根の境の獅噛は 20°であった。獅噛については取り付け位置による角度の差はあまりないことがわかる。また、中之町のだんじりの背面小屋根棟端に位置する獅噛の角度は、20°であり、原野農芸博物館所蔵だんじりの獅噛と同じ角度であった（表 2)。

次に、大屋根下の彫物をみていくと、大屋根正面の車板の龍の角度は 40°であった（表 1)。獅噛や枡合と比べると角度が急である。しかし、中之町のだんじりの場合は、車板の龍の角度は 18°と、大きく違っている。獅噛に対してこれだけの差が出てしまった要因は、計測方法が違うことである可能性が高い。

枡合は、左右に 1 頭ずつ阿吽の組み合わせで配置されていたため、両方を計測することとした。右側面大屋根下の枡合の左にいる麒麟は 22°で、右にいる麒麟は 34°であった。対して、左側面大屋根下の枡合の左にいる麒麟は 22°で、右にいる麒麟は 32°であった。どちらも、位置が対応しているものと角度が同じ程度付けられていることがわかった（表 1)。　しかし、中之町のだんじりの場合、右側面大屋根下の枡合の麒麟の角度は左のものが 15°、右のものが 4°と、全く異なる結果が出た。これも、先述の車板と同様に別の計測方法を用いたために出た誤差ではないだろうか。

原野農芸博物館所蔵だんじりのように、部材が分解されたものとは、同様な計測方法を用いることが不可能であるため、中之町のだんじりのような組み立てられているだんじりを計測するためには、計測の精度を上げる方法を編み出すことが、今後の課題である。

５．おわりに

本調査で対象とした原野農芸博物館と中之町のだんじりは、大阪府内のだんじりの中では大型に分類されるものである。そのため、特に屋根周りの彫物が位置が高い分、急な角度を付けているのではないか、と仮定したが、実際に計測した角度は、全体的に緩い角度であった。今後の課題として、小松一門が手懸けただんじりを始めとして、北河内型のものに留まらず、あらゆるだんじりと比較して見ていくことが必要である。計測対象を各地域のだんじりや他の職人にも広げることで、彫物に付けられた角度と、位置との関係を明確にすることができると考える。

（一財）奄美文化財団原野農芸博物館の復興支援をきっかけにだんじりの部材に付けられている角度に着目し、調査をすることが出来た。本章の課題に着眼したのは、集中豪雨で被災し、本来固定されている彫刻部材がはずれ、1 点ずつを詳細に観察することが出来たためである。未だ、被災資料についての支援は終了したわけではない。今後も機会を作り、この活動を続けていきたいと思っている。

表１

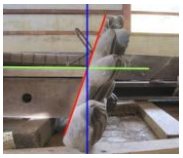
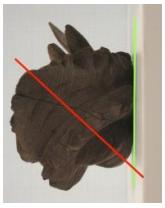
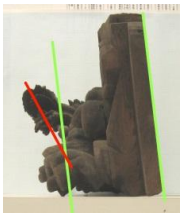
番号	名称	部材位置	地面から彫り物までの高さ(mm)	角度	計測用写真	全体写真
1	獅噛	大屋根 棟端正面	4337	25°		
2	獅噛	大屋根 棟端後	4337	20°		
3	車板　龍の一部(頭)	正面 大屋根下	3764	40°		
4	車板　龍の一部(尾)	正面 大屋根下	3554	32°		
5	虹梁　龍の一部(頭)	正面 大屋根車板下	3134	48°		
6	枡合　(麒麟)左	右側面 大屋根下	3311	22°		
7	枡合(麒麟)右	右側面 大屋根下	3311	34°		
8	枡合(麒麟)左	左側面 大屋根下	3311	22°		
9	枡合　(麒麟)右	左側面 大屋根下	3311	32°		

表１

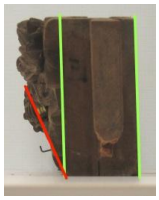
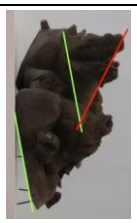
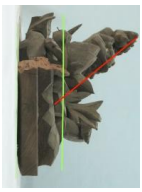
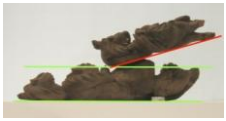
10	柄振板(獅子)	右側面 大屋根小屋根間	3080	18°		
11	虹梁	左側面 小屋根下	2710	38°		
12	虹梁	右側面 小屋根下	2710	22°		
13	車板 (獅子)右	背面 小屋根下	2747	30°		
14	車板 (獅子)左	背面 小屋根下	2747	38°		
15	枡合(獅子)右	左側面 小屋根下	2599	50°		
16	獅子	背面 小屋根車板下	2584	18°		
17	懸魚(鳳凰)	小屋根 背面 正面	4377	50°		

表２

番号	名称	部材位置	地面から彫り物までの高さ(mm)	角度	計測用写真	全体写真
1	獅噛	背面小屋根棟端	4220	20°		
2	正面車板(龍)	正面大屋根下	3840	18°		
3	虹梁上波	正面大屋根車板下	3687	31°		
5	枡合(麒麟)左	右側面大屋根下	3880	15°		
4	枡合(麒麟)右	右側面大屋根下	3912	4°		
6	枡合獅子(左)	右側面小屋根下	3300	17°		
7	枡合獅子(右)	右側面小屋根	3170	11°		

彫物構成・構図比較調査

溝辺　悠介

１．はじめに

比較調査は 26 年度の大東市内 32 台の彫物構成比較調査から始まった。北河内に分布するだんじりの多くは、大屋根、小屋根下の枡合に、龍、麒麟、獅子といった神獣の彫物が配置される。モチーフが同じであるため、彫物の構成や構図を比較することで、彫物師など製作者の特徴が表れるのではないかという観点で、彫物の構成比較、各彫物の構図比較調査を進めた。

２．彫物構成比較

構成比較は、枡合に配される彫物の、①身体の向き、②姿勢、により分類する比較方法である。身体（龍の場合は頭部）を右（Ａ）と左（Ｂ）どちらに向けているのか、姿勢としては、後肢を蹴り上げているもの（Ⅰ）、後肢を地面に接しているもの（Ⅱ）、座っているもの（Ⅲ）、転倒しているもの（Ⅳ）に分け、①と②の組み合わせで彫物構成を分類した。

26 年度の調査は、大東市内 32 台のうち、「小松源助」銘を持つ原野農芸博物館の彫物と、大東市中之町の彫物で彫物構成が完全に一致し、それ以外では一致するだんじりはみられなかった。27 年度では四条畷市雁屋のだんじり調査、28 年にかけては大東市龍間（経寺）のだんじり、大東市御領のだんじりを追調査した。

追調査の結果は表 1 にまとめた。雁屋のだんじり、龍間のだんじりは小松源助の銘文墨書をもち[1]、これにより 4 台の小松源助銘をもつだんじりを比較することが可能となった。御領のだんじりは「西岡又兵衛」の銘文が花台に刻まれている。しかし、鬼板などをみると、東諸福の鬼板（柳原清兵衛）に近く、彫物製作者の同定にはさらなる調査が必要であるが、小松源助以外の製作者のものとして、今回の構成比較の参考とした。

表をみると、小松源助銘の 4 台と御領のだんじりとでは、明らかに彫物構成が違うことがわかる。龍間や雁屋の彫物では、大屋根と小屋根に一部違いがみられるが、基本的には同じ構成を示している。一部違う部分、例えば雁屋の大屋根彫物では、後述の彫物構図比較で一つ一つの彫物を近似値を得られることから、基本となる下絵は同じものである可能性が高い。

表１　彫物構成

	製作年	車板前	大屋根左側面	大屋根右側面	小屋根左側面	小屋根右側面	車板後
原野農芸博物館	伝明治19年	Ｂ	(ＢⅠ)(ＢⅠ)	(ＡⅠ)(ＢⅠ)	(ＢⅠ)(ＢⅡ)	(ＡⅠ)(ＢⅠ)	(ＢⅠ)(ＢⅡ)
大東市中之町	明治12年	Ｂ	(ＢⅠ)(ＢⅠ)	(ＡⅠ)(ＢⅠ)	(ＢⅠ)(ＢⅡ)	(ＡⅠ)(ＢⅠ)	(ＢⅠ)(ＢⅡ)
四条畷市雁屋	明治15年	Ｂ	(ＡⅠ)(ＢⅠ)	(ＡⅠ)(ＡⅠ)	(ＢⅠ)(ＢⅡ)	(ＡⅠ)(ＢⅠ)	(ＢⅠ)(ＢⅡ)
大東市龍間(経寺)	明治12年	Ｂ	(ＢⅠ)(ＢⅠ)	(欠落)(ＢⅠ)	(ＢⅠ)(ＢⅠ)	(ＡⅡ)(ＡⅡ)	(ＢⅠ)(ＢⅡ)
大東市御領		Ｂ	(ＢⅠ)(ＢⅠ)	(ＡⅠ)(ＡⅠ)	(ＢⅡ)(ＢⅡ)	(ＡⅡ)(ＡⅡ)	(ＡⅠ)(ＡⅠ)

３．彫物構図比較

身体の向きや姿勢により分類した構成比較に対し、各彫物をさらに細かく比較するための調査方法として、写真トレースによる比較調査を実施した。方法としては、彫物を正面で撮影し、写真にトレーシングペーパーを重ねて輪郭線を写し取る。写し取ったトレース図をもとに、各部位の間隔や輪郭線が符合するかどうか、構図を比較する。

構成比較では、雁屋の大屋根、龍間の小屋根に相違点があったが、雁屋の大屋根右側面の麒麟（ＡⅠ）は、反転させれば原野農芸博物館、中之町、龍間の大屋根左側面の麒麟（ＢⅠ）と一致する（図 1）。このように、一点づつトレース図で比較をすると、同じ銘文をもつ 4 台では組み合わせに相違はあっても、一点ごとの構図としては同じものであることがわかる。御領の彫物構図は、構成と同様に他の 4 台とかなり違い、製作者の系統が違うことを表している。

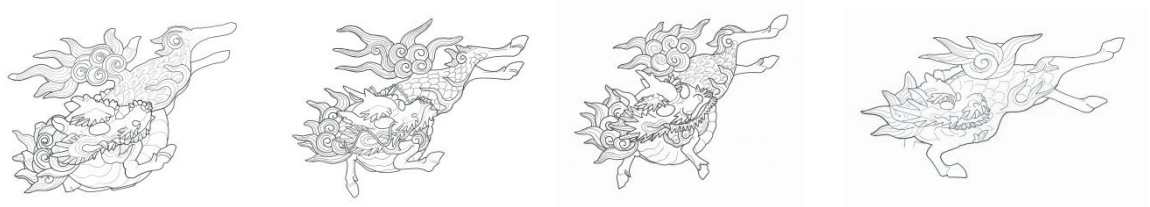


図１　原野農芸博物館、中之町、雁屋（反転）、龍間

トレースによる構図比較では、「輪郭線、凹線を写し取る」という方針を基本に、対象となる彫物に実施した。この方法により細部の違いもはっきりと浮かび上がってきた。たとえば、雁屋の彫物をトレースしていくと、他の彫物との彫り方の違いに気がつく。雁屋の彫物は、凹線を拾って写し取っていくと構図がいびつになる箇所があった。その理由として凸線で図案を表現している箇所が多いことが挙げられる。このような違いは彫刻技法の違いとして考えられ、工期や受注額による違い（省略化など）とは分けて考える必要がある。

４．おわりに

昨年度の報告書で報告しているように、だんじり彫物製作では下絵を元に親方や熟練の職人が粗彫りをする。彫物の構成や構図の一致は、同一の下絵を用いていることを表しており、構図比較では少なくとも同じ工房で製作されたものとみることができる。だんじりを調査する上で、後世の修理歴や銘文墨書の少なさから、製作年や製作人の同定が困難であるという課題がある。その課題に対して、比較調査という方法論を検証してきたが、まだまだ調査対象が少なく、明確な答えを出すには至らなかった。

---

1 昨年度報告書では龍間（経寺）のだんじりについて、「銘文墨書がない」と報告したが、その後のクリーニング作業において墨書が確認された。詳細は第２部第３章、第３部第１章を参照していただきたい。

だんじり彫物の 3D デジタルアーカイブとレプリカ製作

正司　哲朗

１．はじめに

本研究では、だんじりの地車の模型を製作し、展示することを目的としたレプリカ製作を行う。製作する模型は、大東市龍間において、解体された地車であり、すでに彫刻が取り出されているため、昨年度と違い、あらゆる角度から計測が可能である。

本稿では、解体された彫物を 3 次元計測するにあたり、レンジファインダ装置と画像計測の比較を行った結果、レプリカ製作方法、計測したデータの展示、市民学芸員向けの 3D デジタルアーカイブ講習会の実施について報告する。

２．レンジファインダと画像計測の比較

本研究では、だんじり彫物（図 1）を 3 次元計測し、デジタルアーカイブを行った。対象は、麒麟、獅子、龍が彫られた彫物 6 点であり、レンジファインダ装置と画像計測の 2 種類で計測し、計測データを比較する。

レンジファインダ装置は、委託業者により、ハンディ 3D スキャナの Artec Eva を用いて行われた。図 2 にレンジファインダの計測結果を示す。また、画像計測は、Canon EOS7D MarkII を使って撮影した画像を Agisoft Photoscan Professional で処理した。図 3 に画像計測結果を示す。図 2 と図 3 の計測結果を比較すると、レンジファインダ装置の場合は、画像計測に比べて精度が高いものの、この装置で利用されているフラッシュバブル光源が届かないところに、数多くの欠損領域が見られる。一方、画像計測の場合には欠損領域が少ないことが確認できる。

本研究の目的は、1/8 サイズのレプリカを製作することであり、後述するレプリカの製作に利用する 3D プリンタの精度が 0.05mm であることを考慮すると、計測精度よりも欠損領域がないほうが望ましい。したがって、レプリカ製作のために、画像計測データのほうを利用することにする。

(a)麒麟　　(b)獅子　　(c) 龍

図１　3次元計測した龍間のだんじり彫物

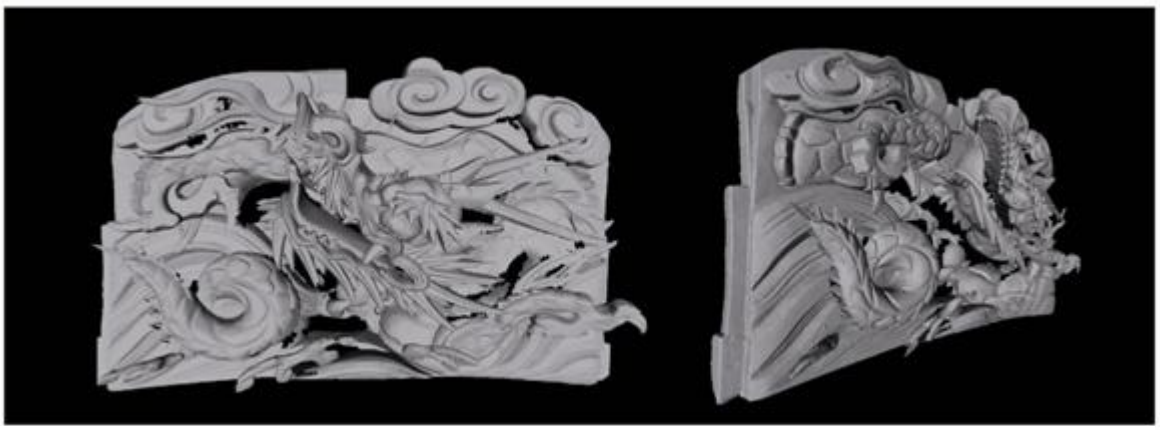


図2　レンジファインダ装置による計測結果

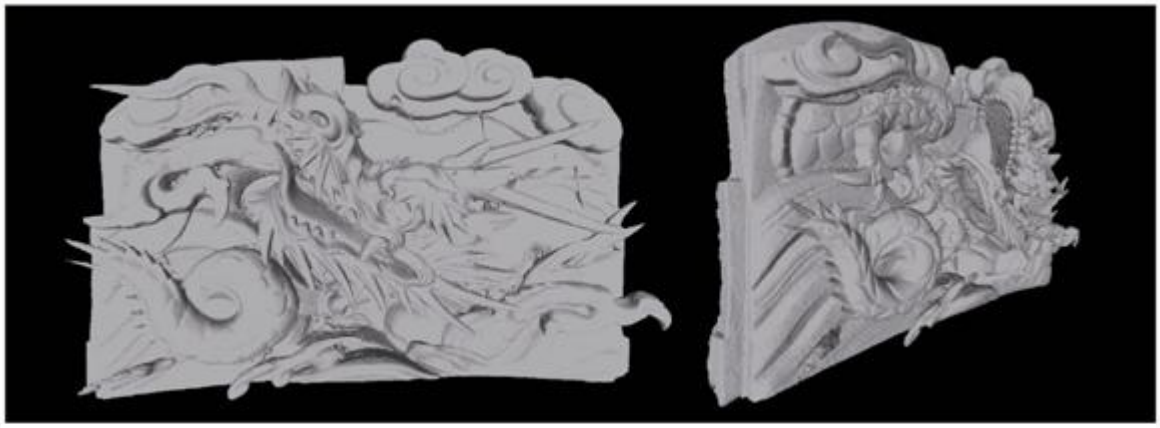


図3　画像計測結果

図4　だんじり彫物のレプリカ製作

（a）表示トップ画面

（b）WebGLによるだんじり彫物の表示

図5　だんじり彫物のデジタル展示システム

３．レプリカ製作とデジタル展示

（１）だんじり彫物のレプリカ製作

本研究では、解体された龍間の地車を 1/8 スケールで模型を製作することを目的としており画像計測した 6 点から 3D プリンタを利用して、約 10cm の彫物のレプリカを製作する。使用した 3D プリンタは、FLASHFORGE DREAMER である。この 3D プリンタは、熱溶解積層方式であり、熱で溶ける樹脂を 1 層ずつ積み上げていくものである。3D プリンタで出力して製作したレプリカを図 4 に示す。印刷時間は、1 体あたり約 15 時間を要した。製作したレプリカは、細部の表面までは再現されていないが、大まかな形状は再現できていることがわかる。ただし、龍の髭は細く、3D プリンタでは再現が難しいため、後から樹脂を細く出力したものを取り付けている。

（２）デジタル展示

2017 年 2 月から開催される鹿児島県奄美市にある原野農芸博物館で行われる企画展示にだんじりの地車の模型とともに、デジタル化しただんじり彫物も展示する。画像計測した

デジタルデータは、一般的な Web ブラウザで閲覧できるように、WebGL (Web Graphics Library)を利用して表示した。WebGL は、特別なプラグインをインストールすることなく、3D グラフィックスを表示できるようにするための JavaScript API である。

閲覧者は、図 5(a)に示すトップ画面から閲覧するものを選ぶと、図 5(b)に示すように、3D デジタルアーカイブした彫物が表示され、マウスを使って自由に視点を変更しながら閲覧することができる。

４．市民学芸員向けの 3D デジタルアーカイブ講習の実施

2016 年 8 月 5 日に、大東市立歴史民俗資料館において、市民学芸員向けの 3D デジタルアーカイブ講習会を実施した（図 6)。講習会では、レンジファインダ装置と画像計測の原理を説明した後に、受講者自身で、だんじり彫物をカメラで撮影し、画像計測処理を行った。画像計測は、カメラとフリーソフト（Autodesk 123D Catch）を利用すれば、気軽に試すことができるため、今後は、受講者自身で身近な文化財に活用されることを期待する。

５．おわりに

本研究では、地車の模型を製作することを目的としており、本稿では、解体された龍間のだんじり彫物を対象に、計測方法の検討から模型で利用する彫物のレプリカ製作、デジタル展示について報告した。また、一般市民向けの 3D デジタルアーカイブ講習会、および 2017 年 10 月 28 日に実施したシンポジウム「だんじりからはじまり、だんじりでひろがる」を通じて、研究成果を公表した。

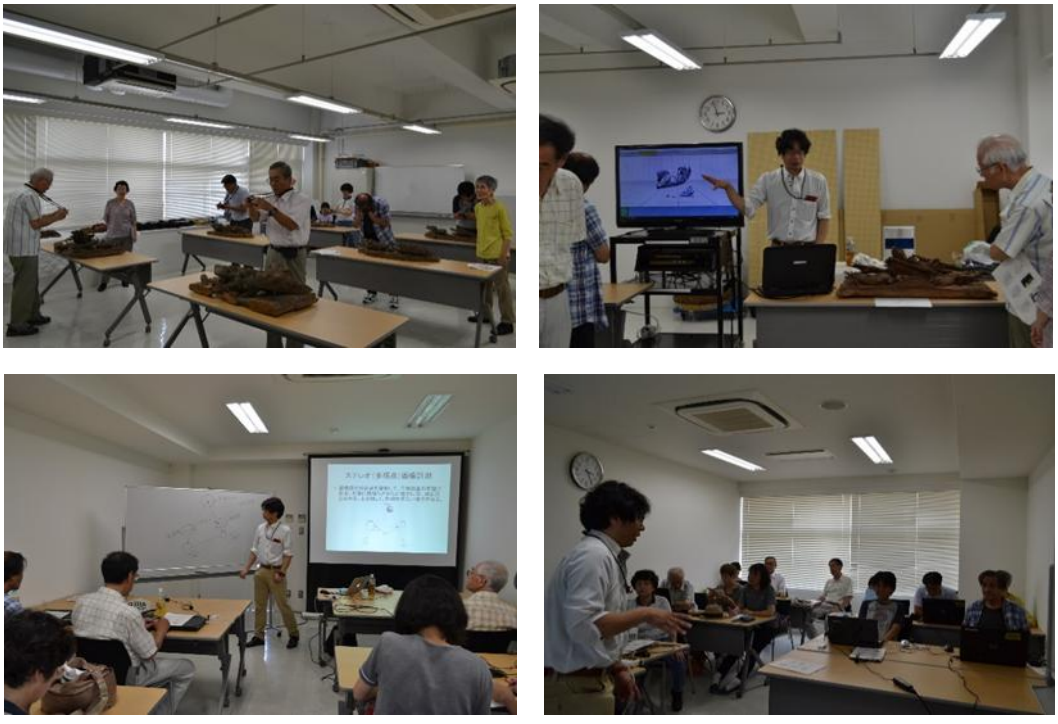


図6　3D デジタルアーカイブ講習会の様子

第　4　部

二つの博物館づくり
―地域の核となるミュージアムへ―

だんじり事業と市民学芸員

武井　二葉

１．はじめに

都道府県立の大規模館、市町村立の小規模館、そして指定管理館、直営館、私立館、それぞれに抱える課題や悩みは存在する。「小さいとこサミット」のような小規模館の集まるネットワーク[1]や学芸員を対象とした研修などの場を通じて、共通の悩みとして語り、解決できることもあるが、各館で独自に検討していくべき課題も多い。特に小規模館においては、「考古」「文献」「民俗」「教育普及」等の自分の専門分野だけを突き詰めるというスペシャリスト型の学芸員である余裕はなく、よく揶揄される「雑芸員」、ジェネラリスト型の学芸員であることが求められる。そのため、これまで培ってきた知識や経験で対応できない課題も多い。また、地方においては、「展示」、「梱包」、「クリーニング」、「アーカイブ」、「ワークショップ」といった研修の受講機会は限られている。

本事業では、市民学芸員、資料館・博物館学芸員、大学教員、外部専門家などが一緒に何かをすることで、このような小規模館が抱える課題に対しても、一定の解決が得られた。そこで、まず事業開始前に当館が抱えていた課題について触れ、次に本事業における市民学芸員活動を中心に紹介し、どのように解決が得られたのか報告する。

２．大東市立歴史民俗資料館の抱えていた課題

大東市立歴史民俗資料館は、2008 年度から株式会社アステムが指定管理制度のもと運営している。そのなかで「考古」「民俗」「文献」「教育普及」という 4 名の学芸員が配置（2016 年度）されたのは、民間企業の指定管理ならではのことではないだろうか。しかしながら、非常勤職の館長を除けば、40 歳以下というのは年齢構成上、アンバランスであることは否めない。そのため、比較的自由に創意工夫で新しいものを生み出すことはできるが、「展示」「梱包」「クリーニング」といった技術や知識を積み重ねて、経験を培っていくことは難しい面もあった。「展示をもっと見やすくしたい」「普段扱わない資料の梱包やクリーニングをしたい」「館蔵資料の整理をしていくために、デジタルアーカイブを構築したい」「先日のワークショップの評価をしたい」等と思いながら、直接助言や指導を受ける機会もなく、日々の業務に追われていた。

そのことと関連して、市民学芸員の活動についても活動の内容や活動の限界について感じていたところであった。市民学芸員の制度が始まった 2010 年当初は、定年退職を迎えたぐらいの年齢層の方で、かつて結婚や就職を機に大東市に転居した方が比較的多かった。そのなかで、2010 年に市民学芸員とともに行った特別展「神社探訪・絵馬案内」が、市内の文化財を調査し、展示するというモデルであったため[2]、その後の活動も市民学芸員全員で、調査・研究し、展示をするという傾向が強かった。

しかし、ここで問題となるのは調査対象の選定である。資料館学芸員が調査対象や調査方法を指定すれば、ある程度「成果」が得られることもある[3]。それでは、資料館学芸員と同じことを市民学芸員がしているだけで、いつまでもアドバンテージは資料館学芸員にあることになる。

課題の１つには、資料館学芸員には博物館学の専門的な立場から指導・助言できる人間が不在であったことがある。このことは市民学芸員の活動にも影響し、「調査～展示」という博物館活動の一部にしか目が向けられていなかったことが、もう１つの課題としてあった。

３．本事業における市民学芸員活動

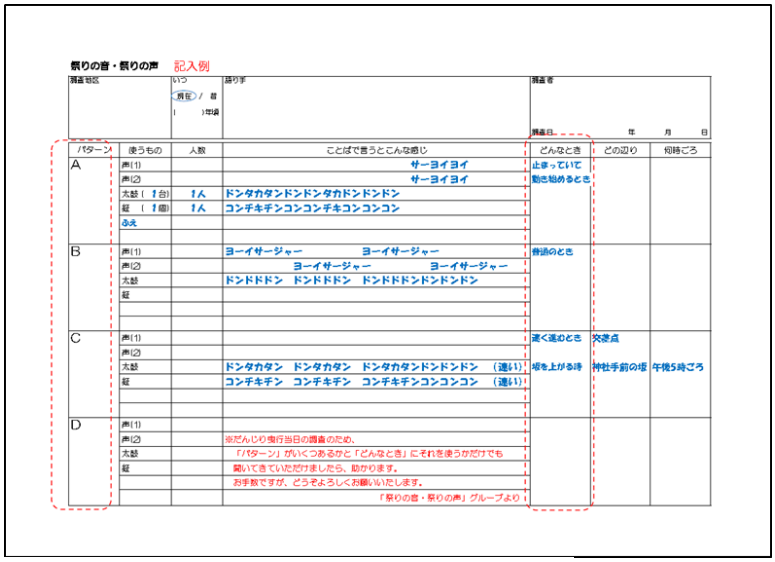
本事業の１年目には、伊達仁美氏による「クリーニング」の講習、大野木啓人氏による「展示」の講習があり、市民学芸員にとっては「調査・研究」以外の博物館を支える学問の存在を知る機会になったと考える。また、資料館学芸員にとっても新たに学ぶこともあれば、再確認できたこともあり、そのスキルを向上できたと考える。

2 年目には、市民学芸員の調査対象や方法について佐藤優香氏に企画と設計をお願いした。そのなかで、「まつりの思い出」といった無形のものを調査対象とすることと、またその展示の方法について市民学芸員にも資料館学芸員にも提示された[4]。

３年目には、市民学芸員の活動としては「祭りの音・祭りの声」の展示と「だんじりのジオラマ」づくりの活動と二つが行われた。以下、その内容について報告する。

（１）祭りの音・祭りの声

昨年度の「だんじりの記録、だんじりの記憶」と並行して、市民学芸員が企画した「祭りの音・祭りの声」と題するだんじり曳行時の太鼓・鉦の音や掛け声の調査が行われた。秋祭りに先行して行われた聞き取り調査では、市民学芸員が設計した「祭りの音・祭りの声」のワークシートを持って調査した（写真 1. 2)。祭り当日には、ビデオ撮影による音・声の収集とともに、内容を見直したワークシートをもとに詳細な聞き取り調査が行われた。



祭りの音・祭りの声　記入例

パターン	使うもの	人数	ことばで言うとこんな感じ	どんなとき	どの辺り	何時ごろ
A	声(1)		サーヨイヨイ	止まっていて		
	声(2)		サーヨイヨイ	動き始めるとき		
	太鼓（ 1台)	1人	ドンタカタンドンドンタカドンドンドン			
	鉦 （ 1個)	1人	コンチキチンコンコンチキコンコンコン			
	ふえ					
B	声(1)		ヨーイサージャー　　ヨーイサージャー	曳頭のとき		
	声(2)		ヨーイサージャー　　ヨーイサージャー			
	太鼓		ドンドドドン　ドンドドドン　ドンドドドンドンドドン			
	鉦					
C	声(1)			遠く近のとき	交差点	
	声(2)					
	太鼓		ドンタカタン　ドンタカタン　ドンタカタンドンドンドン　（速い）	坂を上がる時	神社手前の坂	午後5時ごろ
	鉦		コンチキチン　コンチキチン　コンチキチンコンコンコン　（速い）			
D	声(1)					
	声(2)		※だんじり曳行当日の調査のため、			
	太鼓		「パターン」がいくつあるかと「どんなとき」にそれを使うかだけでも			
	鉦		聞いてきていただけましたら、助かります。			
			お手数ですが、どうぞよろしくお願いいたします。			
			「祭りの音・祭りの声」グループより			

(写真1)市民学芸員による聞き取りワークシート

(写真 2)地域での聞き取り調査

その後、約１年をかけて調査した成果を展示としてまとめていった(写真 3)。対象が「音・声」という目に見えないものであればこそ、展示として「目」に見えるようにするのには工夫が求められる（写真 4)。だんじりの大屋根を模した導入部や各町の法被の紹介やのぼりによる祭りの演出など、市民学芸員それぞれの意見や思いがこめられている(写真 5. 6. 7)。

担当した市民学芸員「祭りの音・祭りの声チーム」(表 1)によれば、この展示では調査したデータを「分析」してはいない。つまり、市内の地域によってどういった傾向があるのか、あるいは他のお囃子との影響関係はどうなのかといった「研究成果」は提示されていない。あくまで「ローデータ（RawData)」をどう魅せるかというところが、今回の市民学芸員活動の中心であった。

１年目は、彫物調査という資料館学芸員主導とならざるを得ない活動であった。２年目の「だんじりの記録、だんじりの記憶」では聞き取り調査が市民学芸員の活動となり、展示は実行委員会が行った。３年目の「祭りの音・祭りの声」は、調査も展示も市民学芸員が行ったものである。この間にかかわっている市民学芸員は同一ではないが、「祭りの音・祭りの声」は「研究成果」を出すことに時間をかけるのではなく、展示にどれだけ市民学芸員のアイデアを注ぐかに時間をかけたものとなった。１年目、２年目の活動が資料館学芸員・実行委員会の俎上にあった展示だとすれば、この「祭りの音・祭りの声」の展示は、市民学芸員ならではの「味」がでるところにきちんと時間をとり、調査から展示まで市民学芸員が一貫して、包丁を握った活動が展開された。

(写真 3)展示についての打合せ

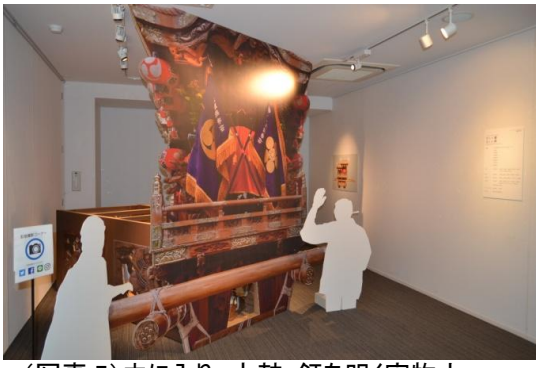
(写真 4)曳行時の音・声を聴き比べ・見比べできる

(写真 5)屋根型エントランス

(写真 6)手づくりののぼりと法被の写真

（２）だんじりのジオラマづくり

だんじりのジオラマづくりの活動は、過去年度に実行委員会が行ってきた活動を、模型づくりを通じて振り返るものである。だんじりの彫物を復元するプロジェクトとだんじりの祭りの様子を復元するプロジェクトに分かれる。後者については、次章の報告に譲り、だんじりの彫物の復元について説明する。



（写真 7）中に入り、太鼓・鉦を叩く実物大体験コーナー

だんじりの彫物の復元では、まず 6 月 19 日に魚島純一氏から彫物のクリーニング講習を受けた（第 2 部第 3 章）。その結果として、3D による計測が可能となり、正司哲朗氏による 3D 計測の講習を体験した（第 3 部第 4 章）。その後、近隣の自働車金型メーカーである明星金属工業株式会社の協力を得て、だんじりの 3D 出力の現場を見学した（写真 8）。

本事業では、活動が多岐にわたり、それぞれの事業同士のつながりが今一つ把握しづらいため、このジオラマづくりの活動を通じて、事業全体の流れを俯瞰することが可能となった。

（表 1）「祭りの音・祭りの声」にかかわった市民学芸員

【企画】
市民学芸員「祭りの音・祭りの声」チーム
柿木薫・小泊繁美・中西昭治・広田美和・前田喜久子・松下茂子・森本長茂
【調査】
氏原稔夫・柿木薫・小泊繁美・中西昭治・広田美和・松下茂子・森井綾乃・森本長茂
【撮影】
上野繁・柿木薫・小泊繁美・中西昭治・広田美和
【展示設計】
柿木薫・小泊繁美・前田喜久子・松下茂子・広田美和
【展示制作】
柿木薫・小泊繁美・竹元智子・中村義之・広田美和・前田喜久子・松下茂子・水永八十生・森本長茂
【フライヤーデザイン】
柿木薫

（写真 8）ものづくりの現場で 3D 出力を見学する

４．まとめにかえて

本事業により、「保存・修復」「アーカイブ」「展示デザイン」「博物館教育」の専門家から、「調査」「研究」以外の博物館に関わる仕事に触れる機会となった。

本事業を通じて、市民学芸員だけでなく資料館学芸員にとっても博物館学の実地研修の場となったことで、それぞれの立場から「資料館」や「博物館活動」について見直す機会となった。3 年間という継続した期間のなかで、博物館にさまざまな立場の人が行き交い、その相互作用により、例えば「人手が少ない」「専門的な助言を受ける機会が少ない」といった「指定管理館」「地方資料館」のデメリットを、「さまざまな人がかかわる」「みんなで考える」というメリットへとかえることができたものと考える。

1 小規模ミュージアムネットワーク（小さいとこネット）http://chiisaitoko.web.fc2.com/
2 有限会社東京パブリッシングハウス編『フォーラム・連続公開インタビュー「美術館ワークショップの再確認と再考察―」』p61-68 を参考とした。
3 だんじりを活かした地域共働事業実行委員会編『だんじりを活かした地域共働事業報告書』p33-35
4 だんじりを活かした地域共働事業実行委員会編『だんじりを活かした地域共働事業報告書Ⅱ「だんじりの記録・だんじりの記憶」』p42-47

だんじり情景模型の制作

佐藤　優香
増田　啓

1．はじめに　−だんじり模型の活用

昨年度からの継続としてだんじりと利用者を結ぶ活動を行った。昨年はだんじりにまつわる音や暦など見えない部分を調査して展示にまとめることを試みた。今年度は、だんじり祭りを見せることに挑戦することになった。

これまでの成果の一環として、だんじりの１：８縮尺模型が工務店により作成されており、それを活用することを条件に活動内容を計画した。模型は木製で、三次元計測の成果である３D 印刷で作成された彫り物をパーツとしてはめることで完成するものになっている。組み立てる作りなので、パッキングしての移動も容易で、学校や他施設に貸出するモバイル展示キットにもなりうる。

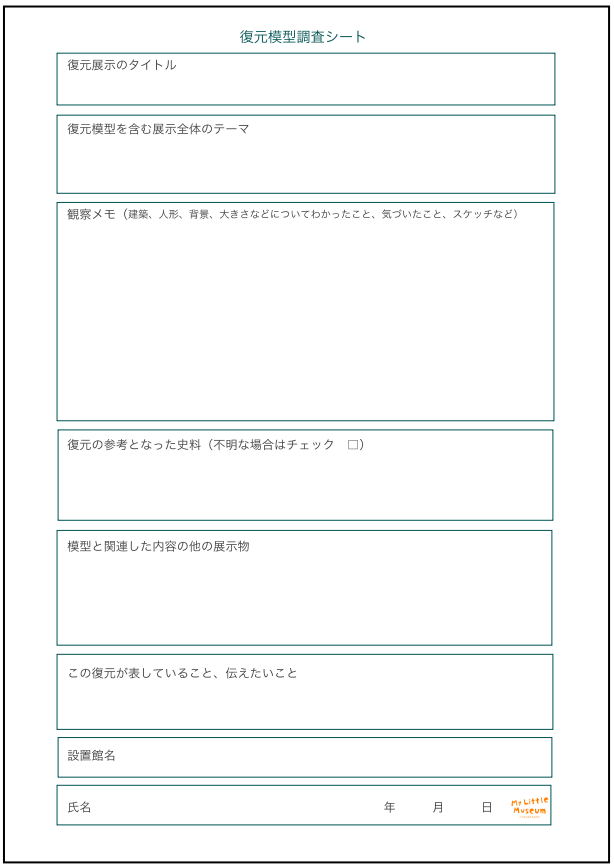
貸出可能で、さまざまな利用が見込まれる模型は、だんじりの形を伝えるには好都合だが、鑑賞者にお祭りの風景を想起してもらうには、なんらかのしかけや他の資料を組み合わせるなどの工夫が必要となってくる。これを祭りの情景を伝えるツールとするために、情景模型の制作を行うこととした。モノとしてのだんじりを、だんじり祭りというコトとして伝えるためのプロジェクトである。だんじり模型がさらなる意味をまとったものとして完成するのみならず、市民学芸員が博物館展示や資料、そして利用者について考える絶好の機会となることが予想された。情景模型は博物館におけるポピュラーな展示手法であり、模型について実践しながら考えるということは、展示における模型の意義や、展示全体の構成について議論するのにたいへん適していることと考えられた。

2．調査から学ぶ　−展示における情景模型調査

制作にあたり、まずは既存の博物館における情景模型調査を行うことにした。調査は、最初に市民学芸員とスタッフがともに博物館へ出向いて調査と意見交換を行い、後日各自で好きな博物館へ行って調査し、さらにそれを発表する会を設けることとした。調査はワークシートを用いることで、見落としがないようにした。

ワークシートの内容は、1)情景模型のタイトル、2)情景模型を含む展示全体のテーマ、3)観察メモ（建築模型、人形、背景、大きさなどについてわかったこと気づいたこと)、4)復元の典拠や参考となった資料、5)この復元が表していること伝えたいこととし、設置館と調査者を明記するようにした。自分たちで情景模型を制作するに際して、模型にはどのような要素が含まれるのか、模型がどのような素材で作られているのか、サイズによる印象や伝わることの違い、他の展示物との組み合わせなどを把握することにした。また、何を参考にして情景模型を制作しているのかを必ず確認する

ようにつとめた。その場合、典拠となる資料が展示されているかについても確認するようにした。模型にこだわりすぎては、展示全体のメーッセージを見失うことにもなりかねない。そこで、何を伝えるために、どのようなタイトルをつけて、どのような模型を制作するのかを考えることができるように、模型単体だけを見るのではなく、テーマとの関連や他の展示物とのバランスにも留意するようにした。


復元模型調査シート

復元展示のタイトル

復元模型を含む展示全体のテーマ

観察メモ（建築、人形、背景、大きさなどについてわかったこと、気づいたこと、スケッチなど）

復元の参考となった史料（不明な場合はチェック　□）

模型と関連した内容の他の展示物

この復元が表していること、伝えたいこと

設置館名

氏名　　年　月　日　My Little Museum

〈全体での調査〉

調査日

2016 年 7 月 6 日

調査先

・大阪くらしの今昔館

・大阪歴史博物館

〈個人での調査〉

2016 年 10 月 7 日の打ち合わせまでに各自で進める。

大阪くらしの今昔館は、情景模型が多数設置されていること、情景模型の中に人物が多数あることから訪問先として選定した。事前確認において、展示図録に模型の解説や典拠史料への言及もあることがわかっており、参考になると予想された。大阪歴史博物館は、通史展示において、さまざまなサイズの人物表現があるとのことで選定した。2 館を訪問した後、全体で意見交換を行った。この見学以降、模型制作工房を主催する増田が制作の専門家として参加することとなった。鑑賞者の視点と制作者の視点から調査を行うことが可能となり、議論もより深まりをみせた。

3．情景模型を制作する　−人物の作成

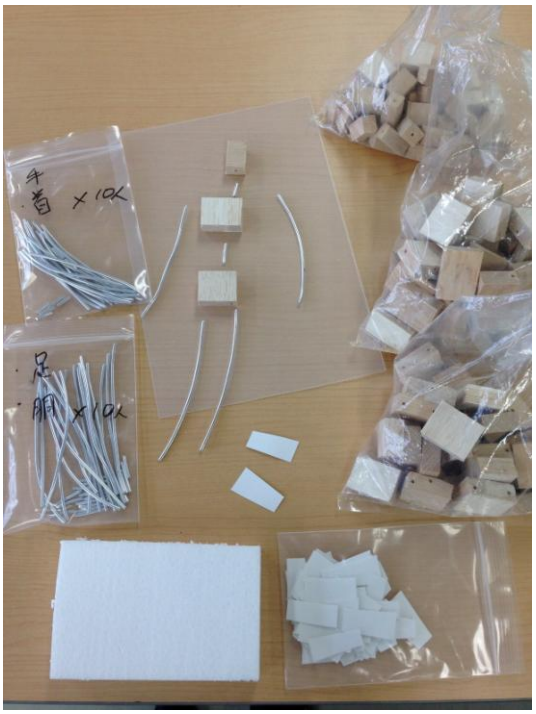
（1）情景の調査と選定

だんじりの周囲に人形を配置することは決めたが、どのような表現にするのか、どの地区のどのシーンにするのか、そのために何を参考にするのかについては、実際の祭りで調査、撮影した写真をテーブルに広げて話し合った。だんじり模型においては各地区のだんじりによって異なる彫り物の部分が付け替え

可能になっている。そこで特定の地区を選び出すのではなく、市内にみられるだんじり一般として扱うことにした。シーンについては、だんじりに乗る人、だんじりを引く人などの配置を観察しやすい写真複数を組み合わせて、だいたいの見当をつけることにした。典拠とする写真を数枚に絞り込み、実際には作りながら配置を調整していくことにした。

（２）人形の制作

人形に求められたのは、1)だんじり模型の大きさから縮尺が 8 分の 1 ＝身長 160 センチの成人男性で 20 センチの身長となること、2)だんじりを動かす人、それを見ている人をあわせておよそ 40 から 50 体必要であること、3)造形初体験の人でも制作でき、かつ短時間で完成できること、4)材料は取り扱いやすく安全で、かつ安価が好ましいことなどである。既存品に同スケールの人形キットもあったが、検討の結果見送られ、紙粘土による造形が採用された。



8 分の 1 スケールは、人体や衣服、持ち物などを省略無しに再現可能で、目を見張るような緻密な作品がある一方で、作者の個性や感性を前面に出した作品という趣旨のものもあり、緻密な再現性だけが価値ではない。ただ群像の表現としては中の何体かが極端に大きかったり小さかったりすると異様な印象となるので、人体の大きさを統一させる必要性があった。そのために先ず 8 分の 1 の人体のスケッチを用意し、その大きさにあわせてアルミの針金で軸を造った。胸部･腰部と頭部は一定のボリュームがある部位なので木片で芯材をつくり、背骨の位置で針金で結合した。手足も木芯に差し込んで支持した。アルミ針金は手で曲げ加工が可能である。先ずこの芯材を個々のポーズに加工し、それに紙粘土で肉付けを施し、また衣服や持ち物も粘土の造形で表現する。紙粘土は市販品を幾種類か試

した結果、特に軽量なものを選んだ。なお芯材に縄巻きなどを施す場合が多いが、今回の場合は無くても問題がなかったので省略することとした。足の芯材は足裏から突出させて模型ベースへの固定に利用することを予定したが、見切りが難しいので足裏の形を紙で造り、芯材に接着剤で固定して足裏の位置が判るようにした。足裏の突出部は製作時の仮置きにも利用でき、未硬化の粘土を保持出来るので好都合である。

このような試作の上で芯材を量産し、材料と工具を揃えて市民学芸員らによる制作を迎えた。なお、紙粘土は多少の皮膚刺激性があり手荒れのおそれがあるので手袋を用意したが、結果的に手荒れを起こした人はいなかったようである。

模型制作は、増田の指導のもと市民学芸員らで行程を確認しながら行ったのち、自由に作業できる日を１週間設定し、さらに京都造形芸術大学の伊達仁美教授のゼミ生らも参加する２回目の全体会を実施した。

当初、だんじりの引き手人形には着色を行わず周囲の見学者人形は着色を行う予定で進めていた。それは、だんじりの地区を限定しないために、モデルとなる人物を特定しないこと、地区ごとにことなる法被の色柄を表さないためである。しかしながら、木製だんじり模型を中心に人形を配置していく課程で、すべて着色ナシの紙粘土の白のままにすることにした。色をつけなくても、それぞれの人形は十分に個性的で存在感があり、着色することで展示として見づらくなることが危惧されたからである。

（３）模型を配置する

だんじりの引き手や、だんじりに乗っている人などの人形は、祭りの写真をみながら配置していった。そこに見学者人形を加えた。見学者人形の多くは祭り調査の際に撮影された実際の様子を参考にしていることから、配置する場所も人形の持つストーリーに合わせるよう留意した。毎回同じように展示することができるように、配置場所を記録した。

（４）資料カードを作成する

人形は、一体ずつに番号をふり、資料カードを作成した。1)どのような人物なのか、2)典拠資料、3)制作者、4)人物の背景などを記録しておくワークシートを作成し、制作者が

記入した。シートには完成した人形の写真を貼付し、博物館の資料カードとしての機能をもたせるようにした。

４．むすび　−市民学芸員が情景模型を制作する意義

市民学芸員らは、情景模型制作のためにいくつかの調査を行った。ひとつは博物館における情景模型の様相と、それを含む展示の在り方である。もうひとつは、祭りをとりまく人に関するもので、どのようにして何名くらいがだんじりの引き手となり、どのような人がだんじりを見ているのかを知るものであった。模型の制作を通して、展示の手法と展示の内容の両方を深めることができただろう。

人形の制作は単純ながら決して簡単とは言えない作業であったが、実施においては何らトラブルは発生せず、参加した全員がそれぞれ何体かずつの完成を見た。制作のための部屋を開放している一週間には、複数回足を運び何体も作った市民学芸員がいた。このプロジェクトに参加していなかった市民学芸員仲間らに「一緒に作ろう」と声をかけている姿もたびたび見られた。資料館の警備スタッフの一人は、自分を投影させて祭りにおける警備の人形を作った。また、祭り調査の写真から猫を抱いている人を捜し出して追加で制作している猫好きの市民学芸員もいた。このように、楽しみと制作への関わりの両方を深めながら、祭りのにぎわいは形成されていった。

完成品としての群像の雰囲気は素晴らしく、個々の人形にそれぞれ個性があるので、実際の多様な人の集まりのような雰囲気が前面に醸し出されたのではないかと思う。また、彩色を施さない白い人形は、展示空間の中で主役のだんじりの邪魔にならず、かえって引き立てる効果があったのではないだろうか。

完成品も、その制作プロセスもたいへん意義深いプロジェクトになったと実感している。

※本稿は、「3-2 人形の制作」を主に増田が、「4 むすび」を佐藤と増田の共同で、それ以外の執筆と構成を佐藤が担当した。

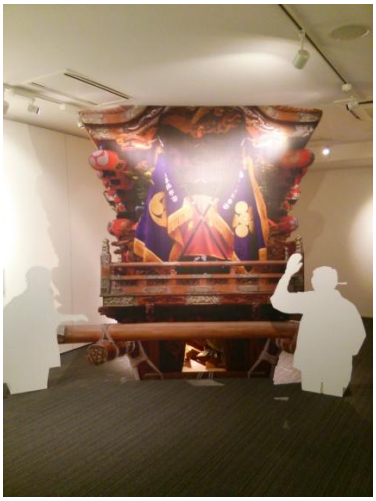
地域社会と博物館のほどよい関係

大野木　啓人

最近、日本の美術館・博物館がようやく重い腰を上げて、ワークショップや市民講座を企画しているのを多く見かけるようになった。従来、学芸員の仕事と言えば、収集・保存と研究が主眼で、常設を含め展示という現場は主に業者やデザイナーに任せることが多かった気がする。地方の郷土博物館などでは潤沢な予算もなく、維持するだけでも四苦八苦しているように思われるところが多い。行政が箱モノをつくり、文化活動の体裁を整えることで精一杯というところが数多くあると、現場で担当して思ってきた。1980 年代をピークに 21 世紀に入って驚くほど予算の削減の現実を見てきた者としては、現実をネガティブに捉えるのではなく、その現状をどう把握し、活路を見出すかである。

予算が少ないから活動できないというのは言い訳に過ぎない。工夫次第では博物館の活性化に人を巻き込み、博物館ならではのスペースを活かした空間活用や教育プログラムの実施等いろいろできると思う。実際に、感度のいい学芸員が居るところでは、すでにいろいろな試みを行ってきているのを見てきた。

その中で大東市立歴史民俗資料館の活動は特筆すべきものである。同館の「市民学芸員」という試みは時間を経て、着実に成果が表れてきた。地域の人達と絶えず関わりを持ちながら同館学芸員がファシリテートすることで、市民の自主性を生み出し、地域に根付く「おもい」を抽出する結果となった。市民自らが訴えたいこと、それをみせる工夫、やり上げる力が我々の前にはっきり現れた気がする。研究発表会や展示作業にはまるで自分たちのことのように積極的であったし、展示企画から展示物の制作まで手作り感が伝わって、その思いや工夫が見る者に心地いい刺激を与えていた。



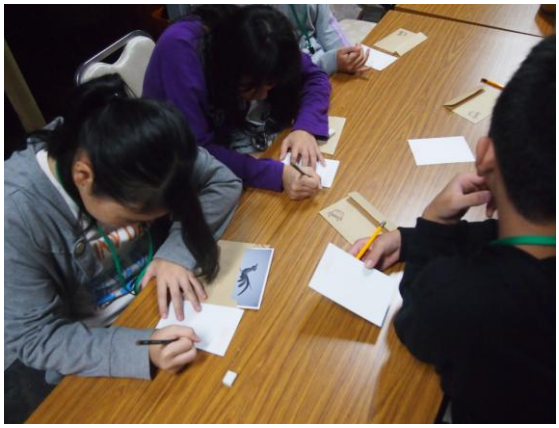
21 世紀型展示は、完成度にこだわり極端にデザイン性を求めてきた気がする。小さなキャプションをいちいち業者に発注したり、お金のかかる看板や、展示台が当たり前のように造られてきた。極端にはデザインから展示まですべて外の業者任せで、見ているだけというところも多かった。

しかし最近はパソコンソフトがよくなり、そこそこ練習すれば誰でも看板やキャプション、解説文等のグラフィックデザインができる時代である。図録デザインも難しくなくなった。多くの解説パネルや写真パネルは自分たちでつくるのが当たり前になって、ひと昔前の業者任せな展示はずいぶん減った気がする。それに並行して、展示作業も手作り感があふれるようになった。良し悪しは時と場合によるが、確実に自らの共同作業で作り上げる展示を見る機会が増えた。このことは、観る人と造る人の距離を縮めることに大いに貢献しているようだ。そういった意味で、市民学芸員の活動はこれからの博物館や美術館にとって重要な役割を担っていく予感がする。

一方、奄美大島の原野農芸博物館では地域の子供たちに焦点を当て、ワークショップを通して博物館と地域社会のつながりを模索する試みに挑戦した。「博物館たんけん！」というテーマで 3 回行われた学芸員体験ワークショップは、地元の子供たちを中心に日頃忘れかけていた博物館を再認識させ、身近なコミュニティ形成を仕掛けるプログラムである。

第 1 回目は普段観ることができない収蔵庫に入り、薄暗い資料棚から自分で選んだものをスケッチ、資料票をつくるというものである。小学生低学年から中学生までの参加者が、サポートをしてくれた本学大学院生と共に見事なスケッチと選んだ思いをかき上げてくれた。

第２回目は選んだ資料の写真撮影とそのカードづくりである。棚から出され、撮影のための台に乗せて、照明を当てることで光が見違えるほど資料を浮かび上がらせることが体験できた。また撮影のこだわりは子供とは思えない発想と観察力を私たちに教えてくれた。



第３回目は展示を実際行い、「みせる」プレゼンテーションを体験するものである。普段気にもかけない石ころの中から選び出したものを綺麗に洗浄する。それにテーマや説明文を入れて展示にするという完成度の高いワークショップを試みた。面白かったのは、小学生低学年と中学生では自分の選らんだ石の大きさが大小はっきり分かれたことである。その理由もなるほどと思えるものであった。普段目にも留めない石ころの展示を通して、選んだ人と観る人との間にコミュニケーションが見事に生まれた気がした。

以前は多くの人々が訪れた原野農芸博物館も、災害以降極端に来場者が少なくなり、地域とも展示を通じたコミュニケーションは殆んど途切れていた。今回の 3 回のワークショップは、興味深い資料が眠っている博物館が近くにあることを再認識し、地元に身近な博物館として子供たちや大人が気付いてくれたこと、そして機会ある毎に博物館に顔を出すようになったことなどの意義があるものであったと思う。

2017 年 2 月 4 日から 3 月 26 日まで奄美大島原野農芸博物館で行われた「博物館のたから探し」展は 1）原野農芸博物館が災害を経ていかに復興を果たしたか。2）大阪だんじりの縁がだんじり文化を再認識し、大東市民学芸員に大きな活動の輪になったこと。そして 3）地域とつながり身近になった博物館の今後を暗示する機会を得たこと、大きくこの 3 つについての報告展である。

この 3 年の活動は、全国的に見ると大きく目立つ活動ではなかったかもしれない。しかし地域と博物館が手をつなぎ、着実に市民にとって「自分達の博物館」と意識づけられた。これは大東市立歴史民俗資料館が社会的文化活動の指針になる役割をきちっと果たしたと断言できる。そして今後の活動に継続・発展できる基礎をしっかりつくったといえるであろう。この事実が全国の博物館・美術館に大きな影響を与えることを期待する。

おわりに

おわりよければ、すべてよし

だんじりを活かした地域共働事業をふりかえって

笠井　敏光

１．はじめに

この事業は、だんじりを活かした地域共働の促進、地域と博物館の連携強化のため、市民と学生が共働で調査や展示を行う中で双方が学びあう環境をつくるとともに人材育成につなげること、また市民・地域・博物館の連携を進めることを目的に、だんじりの調査・展示事業を行った。

２．平成 26 年度事業

原野農芸博物館に保管されていただんじりは、平成 22 年の集中豪雨により大きな被害を受けた。翌 23 年から 26 年までは、京都造形芸術大学による復興支援活動として、被災資料のクリーニング、収蔵庫の整理、台帳照合、調査、展示などの作業が継続して行われた。

だんじりの資料化が行われたことで、新たな段階を迎えた。それは、これまで作業にあたってきた学生と、大東市立歴史民俗資料館で活動してきた市民学芸員が共働し、講義や実習を通じて、学生と市民が学びあい、だんじりを調査分析し、その成果を展示しようとするものである。

一方、大東市内には 34 台のだんじりがあり、彫物師などの銘が確認できたのが 10 台である。そのうち、中之町と原野農芸博物館のだんじりには「小松源助」銘が共通しているので、写真・トレースによって構図の比較を行った。また、市内 32 台のだんじりについて、彫物の構図を比較したところ、龍・獅子・麒麟などの意匠と向き、型などによって分類できることが分かった。

３．平成 27 年度事業

2 年目には、だんじりに関わる記録と記憶をテーマに活動した。まず、記録では、保存修復作業の経緯やその内容をまとめ、写真を利用した破損部材の位置特定を行い、被災資料のクリーニングを通した人材育成として位置付け、デジタル・アーカイブを構築し、そのプロセスの明確化と情報管理の体系化を試みた。また、3D 計測による彫物の比較調査を行い、3D プリンタで出力されたものを提供することで、研究成果の一部を市民に還元することができた。さらに、「小松源助」銘の 3 台の彫物について写真トレースによる構図の比較を行った。その他、だんじりに刻まれている銘文・書かれた墨書、棟札や古文書などの記録作業も実施した。

記憶では、お囃子やかけ声、関連する行事、思い出など「人への聞き取り」で得られる作業を通して「目にみえないもの」を調査した。フィールド調査では、4 種類のシートが用意された。「だんじりの音：お囃子・かけ声」では、だれが何を使って、ど

んな音を、どんなタイミングで行うかを調べた。「だんじりの暦：この時期にこんな事」では、年間の行事名、いつやるか、いつからやっているか、どんなことをするのかなどをまとめた。「だんじりの暦：おきまり料理」では、料理の名前、これを食べる機会、作る人、食べるメンバー、食べる理由、思い出などを記録する。「だんじりの思い出・あんな事こんな事」では、人々の中にある様々な記憶、思い出を抽出した。

以上から、どの地域で、どのようなだんじり祭りが行われているか、祭りに関する年間行事、地域の人たちの思い出を紹介することの視点で展示が行われた。

４．平成 28 年度事業

最終年度には、3 年間の成果をデジタルアーカイブとしてまとめ、インターネットを活用した情報発信を目的とした。

まず、被災資料の保存修復作業とクリーニング作業によって文化財の価値を理解し、人材育成にも貢献することを明らかにした。また、様々な形で行われた資料化をもとに、資料台帳と部材の地図を作成した。

次に、だんじりにまつわる文字史料の調査を行い、だんじりが建造されるときの経過や作者などが明らかになった。さらに写真トレースによる構図の比較が大変有効であることも判明した。彫物の角度計測調査によって、彫物に付けられた角度と、位置との関係を明確にすることができた。そして 3D デジタルアーカイブによるレプリカ制作を行うとともに、これまでの成果をデジタルアーカイブとしてまとめ、情報発信した。

展示・普及の面からは、この事業を通じて、館外の専門家や市民学芸員とともにクリーニング・梱包・展示・解説・ワークショップなどを自ら学ぶとともに、市民や子どもたちにアウトプットすることができた。また、だんじりの 1：8 縮尺模型とともに情景を表現するために人物模型の制作も行った。

５．むすびにかえて

1 年目は被災資料の復興支援活動とその資料化を行い、2 年目はだんじりに関わる記録と記憶をテーマに活動し、3 年目はそれまでの成果をデジタルアーカイブとしてまとめ情報発信した。

だんじりをひとつのツールとして、市民と学生が調査を行い、市民・地域・博物館が連携を深め、記録と記憶を共有化するとともに「目にみえないもの」も展示し、さらに 3D 計測による情景模型制作とデジタルアーカイブによる発信も行うことができた。これもひとえに、地域の多くの方々、各分野の専門家のみなさん、市民学芸員、大学、学生などの共働のおかげである。記して感謝したい。

【資　料　編】

図版　写真
原野農芸博物館

鬼板

車板前

車板後

車板後

大屋根左側面

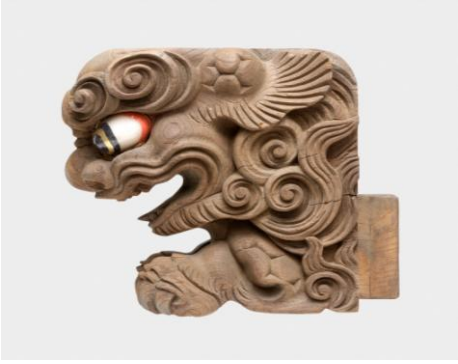
大屋根左側面

大屋根右側面

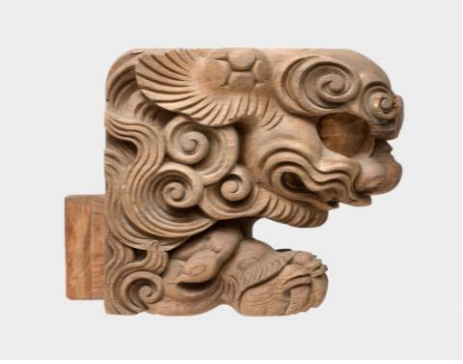
大屋根右側面

小屋根左側面

小屋根左側面



木鼻（獅子・阿）



木鼻（獅子・吽）

図版　写真

中之町地車保存会

鬼板

車板前

車板後

車板後

大屋根左側面

大屋根左側面

大屋根右側面

大屋根右側面

小屋根左側面

小屋根左側面

木鼻（獅子・阿）

木鼻（獅子・吽）

図版　写真

雁屋地車保存会

鬼板

車板前

車板後

車板後

大屋根左側面

大屋根左側面

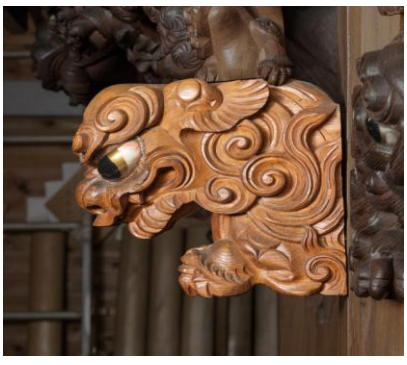
大屋根右側面

大屋根右側面

小屋根左側面

小屋根左側面

木鼻（獅子・阿）



木鼻（獅子・吽）

図版　写真
龍間自治会

鬼板

車板前

車板後

車板後

大屋根左側面

大屋根左側面

大屋根右側面

小屋根左側面

小屋根左側面

木鼻（獅子・阿）

木鼻（獅子・吽）

図版　写真
御領地車保存会

鬼板

車板前

車板後

車板後

大屋根左側面

大屋根左側面

大屋根右側面

大屋根右側面

小屋根左側面

小屋根左側面

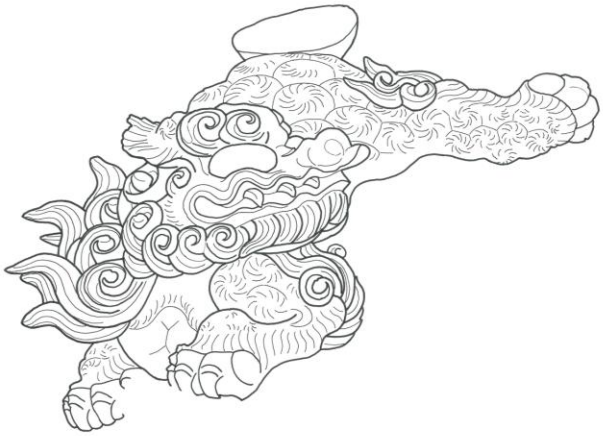
木鼻（獅子・阿）

木鼻（獅子・吽）

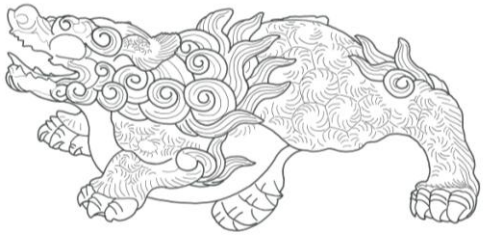
図版　トレース
原野農芸博物館

鬼板

車板前



車板後



車板後

大屋根左側面

大屋根左側面

大屋根右側面

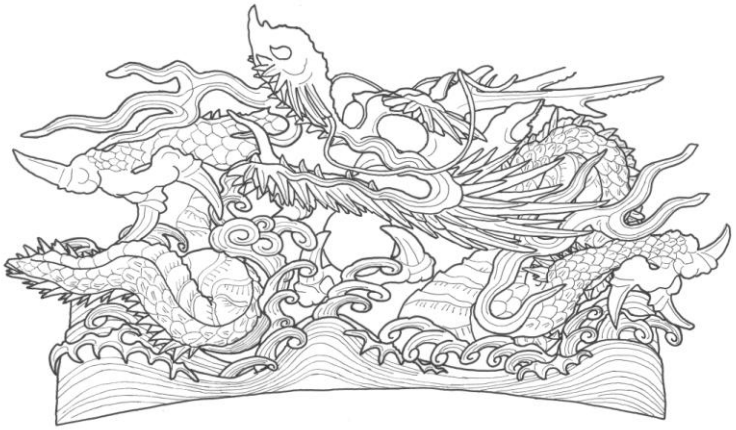
大屋根右側面

木鼻（獅子・阿）

木鼻（獅子・吽）

図版　トレース
中之町地車保存会

鬼板



車板前

車板後

車板後

大屋根左側面

大屋根左側面

大屋根右側面

大屋根右側面

木鼻（獅子・阿）

木鼻（獅子・吽）

図版　トレース
雁屋地車保存会

鬼板

車板前

車板後

車板後

大屋根左側面

大屋根左側面

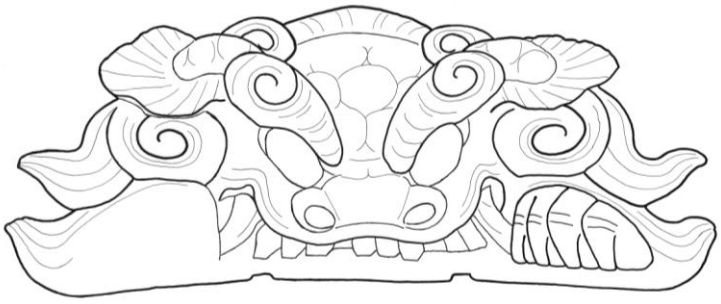
大屋根右側面

大屋根右側面

木鼻（獅子・阿）

木鼻（獅子・吽）

図版　トレース
龍間自治会



鬼板

車板前

車板後

車板後

大屋根左側面

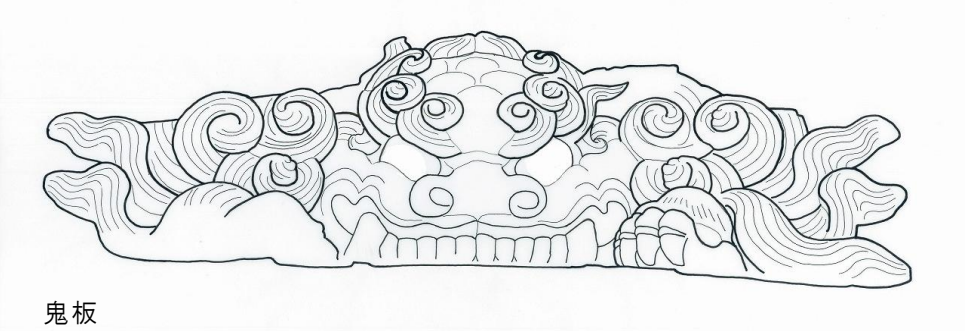
大屋根左側面

大屋根右側面

木鼻（獅子・阿）

木鼻（獅子・吽）

図版　トレース
御領地車保存会



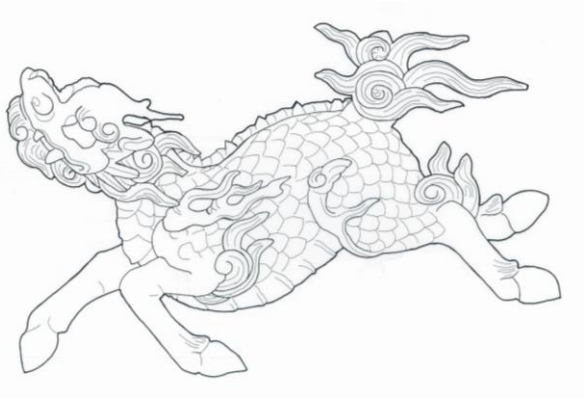
鬼板

車板前

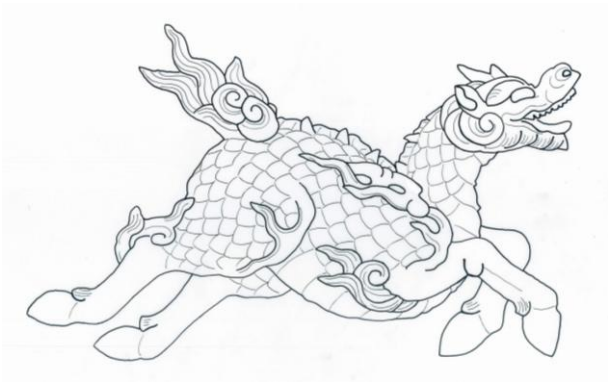
車板後

車板後

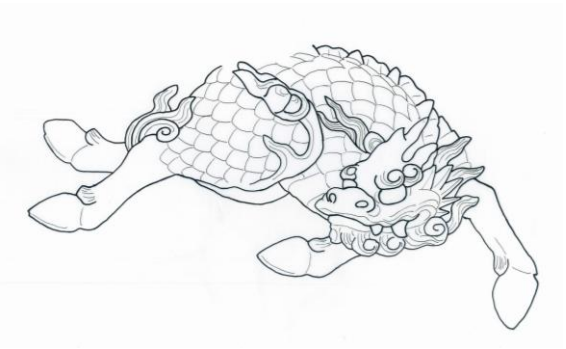
大屋根左側面



大屋根左側面



大屋根右側面



大屋根右側面

木鼻（獅子・阿）

木鼻（獅子・吽）

参考資料（広報物・新聞記事）

。

平成 26 年度展示事業

「だんじりの彫物　小松源助から探る」広報物

平成 27 年度展示事業

「だんじりの記録、だんじりの記憶」広報物

平成 28 年度展示事業

「祭りの音　祭りの声」広報物

平成28年度文化庁地域の核となる美術館・歴史博物館支援事業

博物館たんけん!

～学芸員体験ワークショップ～

「博物館」には数え切れないほどの資料が保管されていますが、展示でみなさんに見てもらえるのは、ほんの一部に過ぎません。博物館の資料って、なにがあるのでしょうか？
また、そこからなにがわかるのでしょうか？
博物館で働く学芸員となって、博物館を探検してみませんか？

第１回　2016年　８月２８日(日)
第２回　　１１月　６日(日)
第３回　　１１月２７日(日)

◎対　　象　：　小学1年生～中学3年生(同伴の保護者の方も参加できます)
◎定　　員　：　各回15名(要事前申込。応募者多数の場合は申し込み順)
◎参 加 費　：　無料(交通費は各自ご負担ください)
◎開催場所　：　原野農芸博物館(奄美アイランド)
◎時　　間　：　9:30～12:00(受付9:15より)

<申し込み方法> メールまたはFAXにて、必要事項を記入してお申し込みください。
◎宛　　先　：　(メール)haranoam@lime.ocn.ne.jp　(FAX)0997-69-2222
◎必要事項　：　参加者氏名、学年、保護者氏名、住所、緊急連絡先(電話番号)
◎申込締切　：　各開催日の2日前まで

問い合せ先　>>>　（一財）奄美文化財団 原野農芸博物館（TEL：0997-69-2248）

主催：だんじりを活かした地域共働実行委員会
共催：(一財)奄美文化財団 原野農芸博物館
協力：奄美市教育委員会、京都造形芸術大学

文化庁

博物館たんけん! 学芸員体験ワークショップ

第1回　2016年8月28日（日）　9:00～12:00
収蔵庫を探検してみよう！　～スケッチを通して資料をみる～
普段は入れない博物館の裏側「収蔵庫」。ここにはたくさんの資料があります。
収蔵庫から好きな資料を選んできたら、その資料をよく観察して、スケッチしてみましょう。そして資料カードをつくってみましょう。

第2回　2016年11月6日（日）　9:00～12:00
写真を撮ろう！　～選んだものをかんがえてみよう～
博物館では集めた資料の持っている情報を調査して、記録する仕事があります。
選んだ資料を写真に撮って、写真の見え方をみんなで考えてみましょう。

第3回　2016年11月27日（日）9:00～12:00
デザインって何だろう？　～展示ケースに資料をいれてみる～
博物館は資料を保管して調査するだけではなく、その成果をみなさんに知ってもらうために展示（公開）をします。「自分が気づいたことを誰かに伝える」見せ方を体験してみましょう。

講　師　：　京都造形芸術大学教員
場　所　：　原野農芸博物館(奄美アイランド)

奄美大島
名瀬
住用町
原野農芸博物館（奄美アイランド）

平成 28 年度事業
「博物館たんけん！学芸員体験ワークショップ」
広報物

平成 28 年度展示事業

「博物館のたからさがし

～奄美に渡った大阪のだんじり～」広報物

【第3種郵便物認可】 2016.8.29(月) 奄美新聞 奄 美

好きな資料を観察・スケッチ

博物館の収蔵庫探検

原野農芸博物館 子ども対象にワークショップ

だんじりを活かした地域協働実行委員会主催の「博物館たいけん！」が28日、奄美市住用町山間の原野農芸博物館（奄美アイランド）であった。小・中学生らを対象とした学芸員体験ワークショップで、地元の子どもたちやその保護者が参加。学芸員になりきった参加者らは普段は入れない博物館の収蔵庫の中を探検。好きな資料を観察・スケッチし、その魅力に触れた。

参加者はライトを片手に博物館の収蔵庫の中を探検した。

文化庁の地域の核となる美術館・歴史博物館支援事業の一環。2010年の奄美豪雨で同博物館が被災した後、約3年に渡って復興をサポートした京都造形芸術大学の講師、学生ら6人もワークショップに参加し、子どもたちに助言を行った。

参加者は、ペンライトを片手に収蔵庫を探検。数多くある資料の中から「鳥」をテーマに好きな資料を探し出し、なぜそれに興味を持ったのか、それぞれが発表。また選んだ資料をよく観察し、スケッチなど行った。

参加した奄美市笠利町の本間崇寛君（8）は「今まで見たことのない珍しい物がたくさんあって面白かった」と笑顔。

同大学副学長の大野木啓人教授は「これからの芸術活動は決して特殊な人、一部の人だけがやるものではなく、全ての人が豊かに生きる要素としてやっていくもの。この博物館をはじめ、奄美には魅力的な資料館・博物館が点在するが、その魅力・価値を地域の人にもっと知ってもらいたい。文化もそうやって守られる。このワークショップがそうしたきっかけになれば」と話していた。

同ワークショップは同日を皮切りに全3回を予定。第2回は11月6日、第3回は同27日に同博物館で開催。時間は午前9時半～正午。小1～中3が対象で参加費無料。事前申し込みが必要で申込方法はメール（hanoam@lime.ocn.ne.jp）か、FAX（0997-69-2222）。参加者と保護者の名前、学年、住所、電話番号を記入する。

「奄美新聞」平成 28 年 8 月 29 日 ((株)奄美新聞社提供)

(9) 社会 2016年(平成28年) 11月8日 火曜日 南海日日

児童生徒が学芸員体験

博物館活動へ理解深める

奄美市住用町

小中学生を対象にした「博物館たんけん！～学芸員体験ワークショップ」が6日、奄美市住用町の原野農芸博物館（奄美アイランド）であった。住用町内の児童生徒10人が収蔵資料の写真撮影と記録を体験。普段、目にする機会のない貴重な民俗資料も見学し、博物館活動への理解を深めた。

京都造形芸術大学の教授や研究員でつくる「だんじりを活かした地域協働実行委員会」の主催。同大学は2010年の奄美豪雨で同博物館が被災した際に学生らを派遣して復旧作業を支援し、その後、損壊した収蔵資料の修復などを続けてきた。業務体験イベントは、博物館と連携した取り組みで、8月に行った資料収蔵庫の探検・スケッチに続き2回目。

児童生徒は、収蔵庫に保管された約7千点の民俗資料から、来年の干支にちなんで鳥の形をした器や装飾品などお気に入りの1点を選択。三脚に据えつけた一眼レフカメラのファインダーをのぞき込みながら撮影した。年賀状に使えるようキャプション（説明文）づくりにも挑戦した。

ニワトリの置き物を撮影した瑞島瑠生君（15）＝住用中3年＝は「同じ置き物でも光の当たり具合や角度でイメージが違ってくることを実感した。体験を通して博物館への興味も湧いた」と話していた。

今月27日に開く次回のワークショップでは資料展示を体験する。

収蔵資料の写真撮影などを体験したワークショップ＝6日、奄美市住用町の原野農芸博物館

「南海日日新聞」平成 28 年 11 月 8 日

新聞　【第3種郵便物認可】

豪雨災害からの

復興過程を展示

住用町の原野農芸博物館

「博物館のたから探し」

「博物館のたから探し～奄美に渡った大阪のだんじり～」だんじりを活かした地域共働事業実行委員会主催」が4日から、奄美市住用町の一般財団法人奄美文化財団「原野農芸博物館」（原野耕三館長）で始まった。展示を通じ、2010年の奄美豪雨災害からの復興・復旧過程や収蔵物の希少性に触れることができる。展示は3月26日まで。

同館は照葉樹林文化をテーマに、生活用具や祭祀儀礼など有形・無形文化を調査収集し、南西諸島文化との比較展示を行ってきた。10年の豪雨災害で被災。地元内外の関係者の支援のほか、京都造形芸術大学の学生らの復旧作業により、8年間かけてだんじりなどが修復された。

会場には、10年の被災から学生らによって修復された所蔵物のほか、同館の保管物と本土のだんじりの比較、2010年の被災から現在までの復興過程などが並んでいる原野農芸博物館の展示会

大阪府の祭りを再現した8分の1サイズのレプリカも情景模型として展示されている。こちらは、同館で昨年3回に渡って開催された「こども学芸員ブログ」の成果も並んでいる。

同大教授で同委員会委員の大野木啓人さんは、「大きな被害を受けながら、ここまで展示することができた。復興のドラマを感じ取ってほしい。様々な展示物があることを知っていただき、子どもたちと博物館とのつながりから、今後教育現場でも生かしてもらえたら」と話した。

開館時間は午前9時から午後5時。入館料は大人200円で、高校生以下は無料。展示は3月26日まで（火、水曜は休館）。

「南海日日新聞」平成 29 年 2 月 5 日

「奄美新聞」平成 29 年 2 月 5 日

（(株)奄美新聞社提供）

南海日日新聞

日新聞　2017年(平成29年) 2月5日　日曜日　社会　(8)

話題の最前線

被災だんじり展示再開

2010年10月の奄美豪雨で被災した奄美市住用町山間の奄美文化財団「原野農芸博物館（原野耕三館長）で4日、復興記念特別展「博物館のたから探し～奄美に渡った大阪のだんじり」が始まった。

施設内に流れ込んだ土石流で解体され、手付かずの状態だっただんじりは、京都造形芸術大学の学生らが泥を洗い落とすなどして整理し、部材の位置を特定。作業開始から約6年かけてようやく展示再開に至った。学生たちの取り組みは写真などで紹介。復興までの道のりとともに、貴重な資料の価値もあらためて学ぶことができる企画展だ。展示は3月26日まで。

特別展は、「だんじり」そのほか甚大な被害を受けを活かした地域共働事業」実行委員会主催、同館は奄美豪雨で収蔵庫や展示室が土砂に埋まり、用して来島した同大の学生や地域住民がボランテ

大学生ら6年かけ修復

原野農芸博物館、奄美市

だんじりの彫り物など計41点を展示する原野農芸博物館の復興記念特別展＝4日、奄美市住用町

奄美豪雨で土砂に埋まっただんじりの洗浄作業に当たる京都造形芸術大の学生ら＝2016年2月、奄美市住用町（原野農芸博物館提供）

イアで収蔵品の修復活動を行った。同館の展示は13年12月に再開した。

同館によると、所蔵するだんじり1基は、1997年ごろに大阪府から移設された。豪雨後、学生らは整理作業で500点以上の部材に分け、資料のデータベース化を進めた。照合作業の過程で、だんじりの彫り物から銘文が見つかり、江戸時代の史料などから、彫物師の小松源助作であることも判明した。

特別展の展示品は全41点。このうち、だんじりの彫り物は6体で、大阪府大東市で実際に使われていただんじりに飾られていた明治時代のもの。奈良大学の協力も得て、3Dプリンターでだんじりを再現（実際の8分の1サイズ）したほか、16年度に同実行委が地元の小中学生を対象に企画した「こども学芸員ブログ」の活動の様子なども紹介している。

京都造形芸術大学の大野木啓人教授は「これまでの活動の集大成とも言える特別展。地域の方々や学生たちが博物館の復興に向けて一緒に取り組んだことは、全国のモデル事例にもなると思う。展示品を通して多くの人に博物館の面白さを知ってもらいたい」などと語った。

開館時間は午前9時から午後5時。休館日は火曜日と水曜日。入館料は大人200円、高校生以下無料。詳細は電話0997（69）2248原野農芸博物館。

執筆者紹介

■笠井　敏光　　大東市立歴史民俗資料館　名誉館長
専門及び研究テーマ：考古学・文化政策学。市民を主体とする考古学、市民大学や市民学芸員システムの構築とともに、文化プロデューサーとして各地の文化を活かしたまちづくりに関わる。
また、日韓の市民国際交流ネットワークにも参加している。

■原野　耕三　　原野農芸博物館　館長
専門及び研究テーマ：民俗学。南方より見た稲作文化をテーマに、米を主食とする東南アジアの国々を中心にフィールドワークし、民具などの比較研究、収集を行う。現在は財団の理事長。

■原野　幸治　　原野農芸博物館
専門及び研究テーマ：父と共に東南アジアの国々をフィールドワークし、資料などの管理を行う。現在は財団の会計を担当している。

■伊達　仁美　　京都造形芸術大学芸術学部歴史遺産学科　教授
専門及び研究テーマ：民俗文化財の保存修復、活用。昨今の市町村合併により地域色のある民俗資料館の統廃合を懸念し、小学校で民俗資料を収蔵・展示することを提案して、各地の小学校で展示施設を整備している。

■福原　凡香　　原野農芸博物館　学芸員
専門及び研究テーマ：文化財の保存修復。修理技術者の経験を基に、紙資料を中心とした歴史資料の保存環境や取り扱い方を研究している。

■魚島　純一　　奈良大学文学部文化財学科　教授
専門及び研究テーマ：文化財保存環境の管理、特に充分な設備がなくても行える低酸素濃度処理等を中心とした簡便で実用的な文化財加害害虫の防除法の実践に取り組む一方で、非破壊分析による銅鐸などの保存科学的調査をおこない古代のわざの解明を目指している。

■大畑　博嗣　　大東市立歴史民俗資料館　主任学芸員
専門及び研究テーマ：大谷大学真宗総合研究所 研究補助員、大谷大学研修員を経て、2012 年 4 月より大東市立歴史民俗資料館学芸員、2016 年 4 月より現職。中世堺における仏教教団史が主たる研究テーマだが、明治期の真宗寺院再建史や近代の真宗大谷派学事史に関する論文も執筆。資料館では文献史料を担当。

■甲斐　規予子　　大東市立歴史民俗資料館　学芸員
専門及び研究テーマ：京都造形芸術大学にて文化財の保存修復を専攻。国立民族学博物館企画課において、標本資料の管理業務を担当し、主に標本資料の受け入れ作業や収蔵庫内の環境整備、生物調査を務めた。2016 年 9 月より現職。資料館では民俗資料を担当。

■溝辺　悠介　　奈良県立民俗博物館　主任学芸員
専門及び研究テーマ：株式会社牧野フライス製作所退職後、京都造形芸術大学大学院に在籍。2016 年より現職。主なテーマは、機能分析をもとに地域差や時代変遷の解明を目指す農具研究。祭礼民具の研究も並行し、京都の剣鉾 302 基の計測調査、だんじり彫物計測調査を行っている。

■正司　哲朗　　奈良大学社会学部総合社会学科　准教授
専門及び研究テーマ：主な研究テーマは文化遺産のデジタルアーカイブ。近年では、モンゴル国を中心に遺跡のデジタルアーカイブを行っている。また、デジタルアーカイブしたコンテンツの活用・表現方法に関する研究も行っている。

■武井　二葉　　大東市立歴史民俗資料館　館長
専門及び研究テーマ：美術史を学んだのち、博物館・美術館教育を専攻、博物館・美術館にて実践を重ねる。2009 年より大東市立歴史民俗資料館学芸員として勤務、大阪経済大学非常勤講師（『博物館情報メディア論』『博物館展示論』）を経て、現職。

■佐藤　優香　　東京大学大学院情報学環　特任助教
専門及び研究テーマ：国立民族学博物館講師、国立歴史民俗博物館助教を経て 2012 年より現職。 専門は学習環境のデザインと博物館教育。博物館におけるコミュニケーションについて歴史と実践のふたつの手法で研究。経験の記録と共有の方法および、造形と言語の表現を循環させた学びに関心があり、博物館や小学校におけるワークショップやコミュニケーションのためのツールを多数デザイン。

■増田　啓　　増田文物工作隊
専門及び研究テーマ：主に歴史･考古系博物館の展示に使用する文化財の複製品･復元模造品･模型・標本等の製作および企画･設計、また土器･埴輪等の修復を専門に 30 年余。近年はミュージアムグッズの企画･製作や博物館における体験プログラムの開発と指導などを展開。

■大野木　啓人　　京都造形芸術大学　副学長　教授
専門及び研究テーマ：専門は空間演出デザイン。1967 年から彫刻作品を発表。1972 年からディスプレイデザインを手がける。1983 年三宅一生『ボディワークス』で人形制作を担当。以降ファッションデザイナーと組み多くの新しいマネキンを発表。美術館・博物館の企画展ではアートディレクションや会場構成など幅広くデザインを担当している。

関係者一覧

京都造形芸術大学学生
梅木　友香、甲斐　規予子、茅谷　友惟、三栃　友梨香、小川　豊子
青木　睦実、今村　栞、中嶋　いぶき、松本　祐季、八峠　秀哉

奈良大学学生
藤井　佐由里、赤木　勁太、鎌谷　涼平、田口　沙穂、樋口　安奈
青木　滉太、知念　建司、石橋　憲太郎、岩瀬　智英

市民学芸員
浅野　純郎、上野　繁、氏原　稔夫、岡島　怜子、岡本　尚子、黒川　喜和子、為則　泰明、
為則　照子、中下　志津子、中西　昭治、中村　義之、檜垣　一美、松井　健一、
水永　八十生、岡部　久美子、岡部　吉之、田里　孝子、友田　晴通、西本　明子、
松下　茂子、宮本　喬、柿木　薫、小泊　繁美、田尻　憲章、森井　綾乃、森本　長茂、榎 幸、
北野 武司、為則　泰明、為則　照子、中下　志津子、柴田　俊雄、岡島　怜子、西本　明子、
栗原　妙子、竹元　智子、石田　薫、林田　惠子、　加茂　伸子、広田　美和、前田　喜久子、
松下　茂子

謝　辞

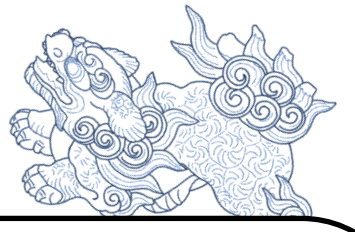
本事業の実施にあたり、下記の方々よりご協力を賜りました。記してお礼申し上げます。

【機関・組織（五十音順・敬称略）】
奄美市教育委員会、赤井自治会、赤井消防団、江ノ口北若中地車会、江ノ口南若中地車保存会、
大野地車保存会、押廻地車保存会、雁屋地車保存会、北野会、北之町地車保存会、
京都造形芸術大学、京都造形芸術大学大学院、御領地車保存会、四條之町地車保存会、
下野地車保存会、下野地車若中、新田地車保存会、吹田市教育委員会、吹田市立博物館
住道青年団、大箇だんじり会、太子田地車保存会、龍間自治会、谷川地車保存会、
辻之町地車保存会、寺川地車保存会、中垣内地車保存会、中之町地車保存会、奈良大学、
西ノ口若中、西諸福地車保存会、野崎第一地車保存会、野崎第二秋祭実行委員会、
灰塚だんじり保存会、東之町地車保存会、東諸福地車保存会、氷野北野神社奉賛会、
氷野地車保存会、平野屋地車保存会、深野北地車保存会深野西若中、奉賛会（御供田）、
朋来地車保存会、南新田・元町青年団、明星金属工業株式会社、有限会社木下彫刻工芸
両皇大神社

【個人（敬称略）】
阿南　辰秀、石山　潤、石橋　恒彦、伊藤　慎司、上田　幸司、大槻　駒子、大島　幸子、
大西　京子、大野木　喜世、岡村　喜史、小川　菜穂、長田　寛康、鍛治梁　沙織、河島　明子、
栗田　美由紀、阪本　常夫、膳師　萌、久　伸博、堀内　保彦、中牧　弘允、西　俊三、
西本　安秀、増田　啓、町　健次郎、、

◆本事業は文化庁「平成 28 年度文化芸術振興費補助金(地域の核となる美術館・歴史博物館支援事業)」を得て、実施したものです。

◆奄美豪雨により被災しただんじりの調査ならびに整理につきましては、京都造形芸術大学保護者会「蒼山会」の研究助成金により実施しました。



文化庁平成 28 年度 地域の核となる美術館・歴史博物館支援事業
だんじりを活かした地域共働事業報告書Ⅲ

発 行 日：平成 29 年 3 月 31 日
編集発行：だんじりを活かした地域共働事業実行委員会
事 務 局：大東市立歴史民俗資料館
〒574-0015 大阪府大東市野崎３－６－１
電話 072-876-7011
印　　刷：株式会社アステム